

京都府埋蔵文化財情報

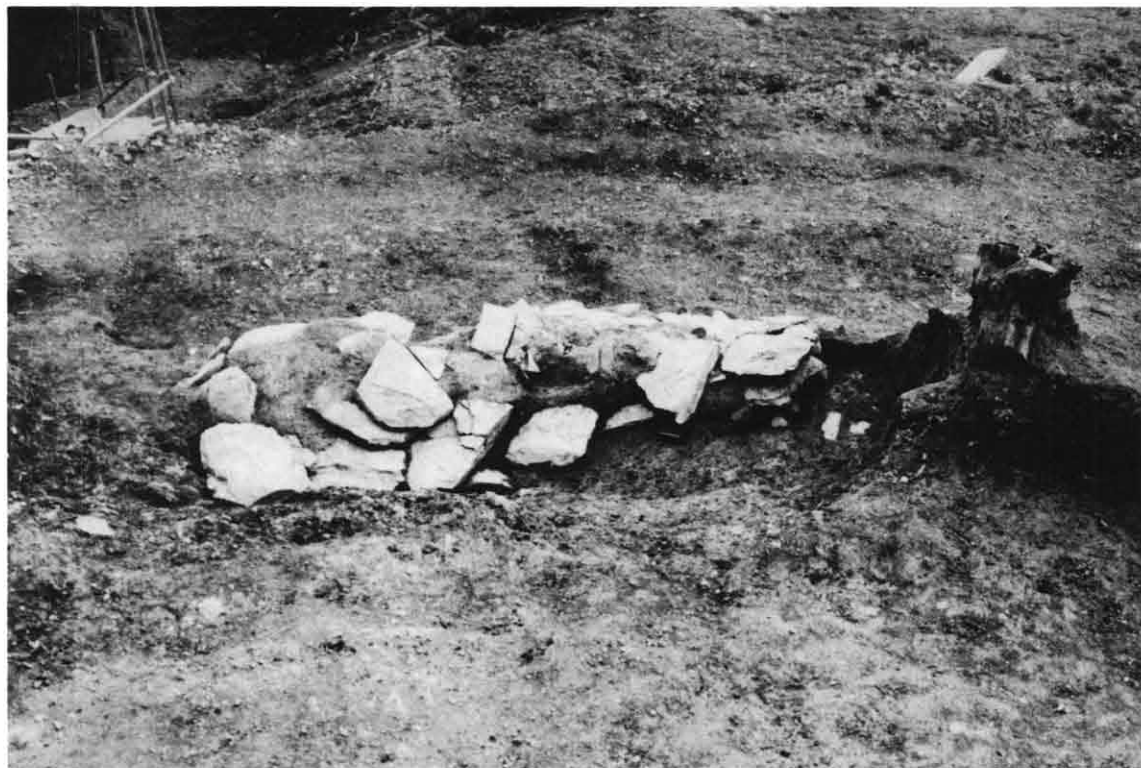
第 17 号

薬王寺古墳群発掘調査概要	山下 正	1
—昭和60年度発掘調査略報—		9
1. 下 畑 遺 跡	4. 長岡京跡右京第193次	
2. 仁 田 城 跡	5. 長岡京跡右京第194次	
3. 長岡京跡左京第124次	6. 木津川河床遺跡	
資料紹介 木津川河床遺跡出土の円窓付土器	田代 弘	21
府下遺跡紹介 30. 長岡宮大極殿跡		24
長岡京跡調査だより		26
第4回「小さな展覧会」を終えて		32
センターの動向		35
受贈図書一覧		37

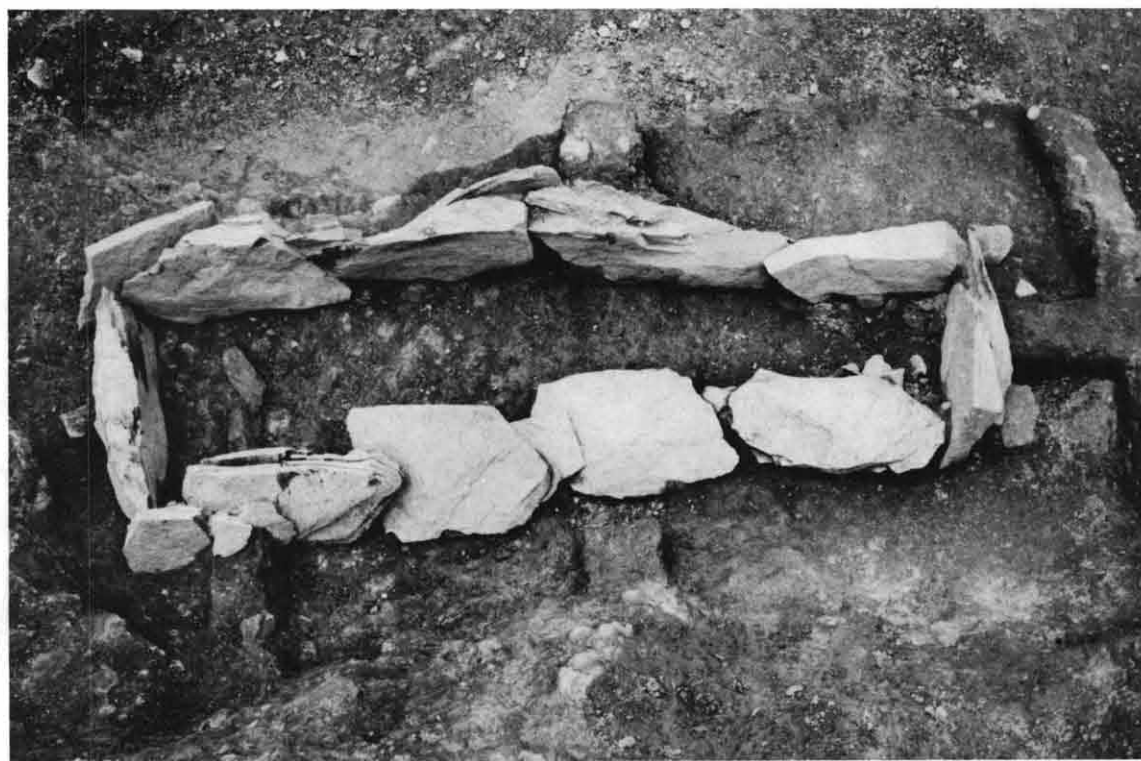
1985年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1 薬王寺古墳群



(1) 4号墳石棺・蓋石検出状況（東から）



(2) 4号墳石棺・側石検出状況（東から）

図版2 木津川河床遺跡出土の円窓付土器



(1) 遺物出土状況SX01 (西から)



(2) 円窓付土器 (正面から)



(3) 同 (側面から)

薬王寺古墳群発掘調査概要

山下 正

1. はじめに

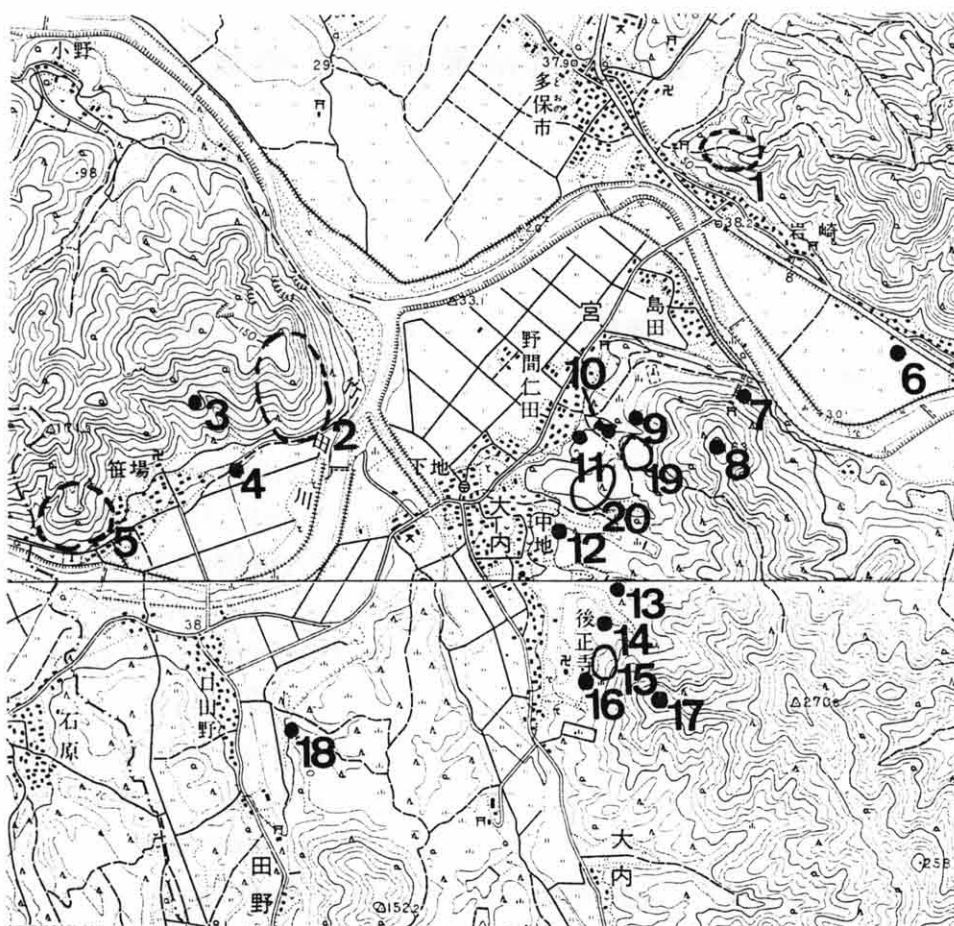
薬王寺古墳群は、福知山市多保市小字薬王寺に所在する。当地は、国鉄福知山駅から南東へ約7kmの位置にあり、由良川の一支流である土師川と兵庫県側から流れてくる竹田川とが合流する付近の丘陵上に立地している。

土師川・竹田川の合流点付近は、その北側にある長田野丘陵によって、由良川本流域と画されており、小規模な谷底平野を形成している。当地域は、古代には「六人部郷」と呼ばれた地で、現在も地名の中に残る。この六人部地域は、中世城館等の遺跡の存在は知られていたが、それ以前の歴史については未解明な点が多かった。しかし近年、開発に伴う調査が多く実施されることとなり、その結果として多くの遺跡が発見され、六人部地域の歴史的な姿が徐々に明らかになりつつある。

六人部地域には、古墳時代後期になると多くの古墳が造営される。前・中期に属するものは現在までのところ発見されておらず、最古のものは、木棺直葬墳である後青寺古墳で、6世紀初頭に比定されている。6世紀中頃には、六人部地域唯一の前方後円墳である男塚古墳や近年調査が行われた小屋ヶ谷古墳が造られており、埋葬施設は横穴式石室を採用し



第1図 調査地位置図



第2図 周辺遺跡分布図(古墳時代) S=1/25,000

1. 薬王寺古墳群 2. 庵戸山古墳群 3・4. 庵戸山古墳 5. 境谷古墳群 6. みこし塚古墳
 7・8. 古墳 9. 城ノ尾古墳 10. 男塚古墳 11. 姫塚古墳 12. 中地古墳 13. 小屋ヶ谷古墳
 14. 後青寺古墳 15. 洞楽寺遺跡 16. 洞楽寺古墳 17. 古墳 18. 口田野古墳
 19. ケシヶ谷遺跡 20. 奥谷西遺跡

ている。これ以後も横穴式石室墳が造られるが、まばらな分布を示す。これに対して竹田川をはさんだ対岸(竹田川左岸)の丘陵には、庵戸山古墳群(11基)、境谷古墳群(6基)等の横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が存在する。このように一つの川をはさんで古墳の分布状況が異なることがこの地域の特徴となっている。^(注1)古墳時代後期の集落は、竹田川右岸の丘陵上の洞楽寺遺跡・ケシヶ谷遺跡・奥谷西遺跡の中で発見されている。

調査は、近畿自動車道舞鶴線建設に伴うものである。薬王寺古墳群の調査は、昭和58～60年度にわたって実施してきた。今回報告するものは、工事中に新たに発見された2基の箱式石棺(薬王寺4・5号墳)の調査の概要である。調査は昭和60年5月17日～7月24日の間実施した。

2. 調査概要

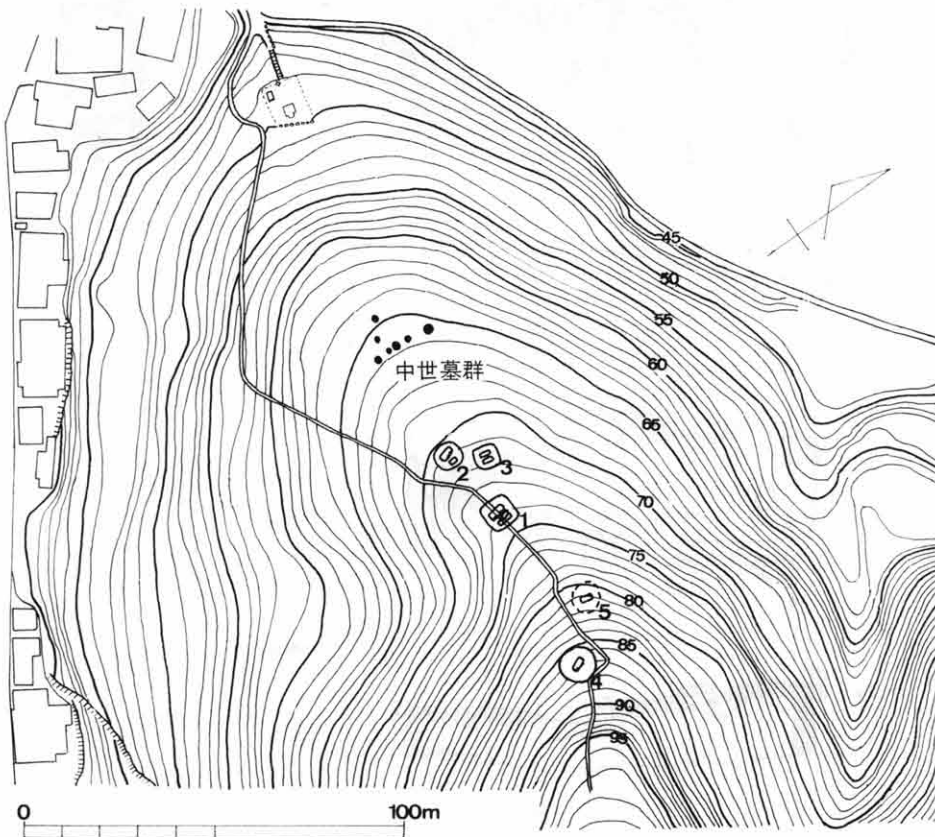
今回の調査は、先述したように工事中に発見された2基の箱式石棺の調査である。発見した順に古墳の番号をつけた。標高の高い位置にあるのが4号墳、低い方が5号墳である。

当古墳群は、すべて東から西へ傾斜する丘陵の稜線上に位置する。1～3号墳が、傾斜変換点の緩傾斜地に立地するのに対して、4・5号墳は、1号墳の東方30～40mの地点にあり、傾斜角20度前後という急傾斜地に立地している。

調査対象古墳は、工事に付随して発見されたため、調査前の旧状はほとんど失われていたので、主体部(箱式石棺)を中心にした調査となった。

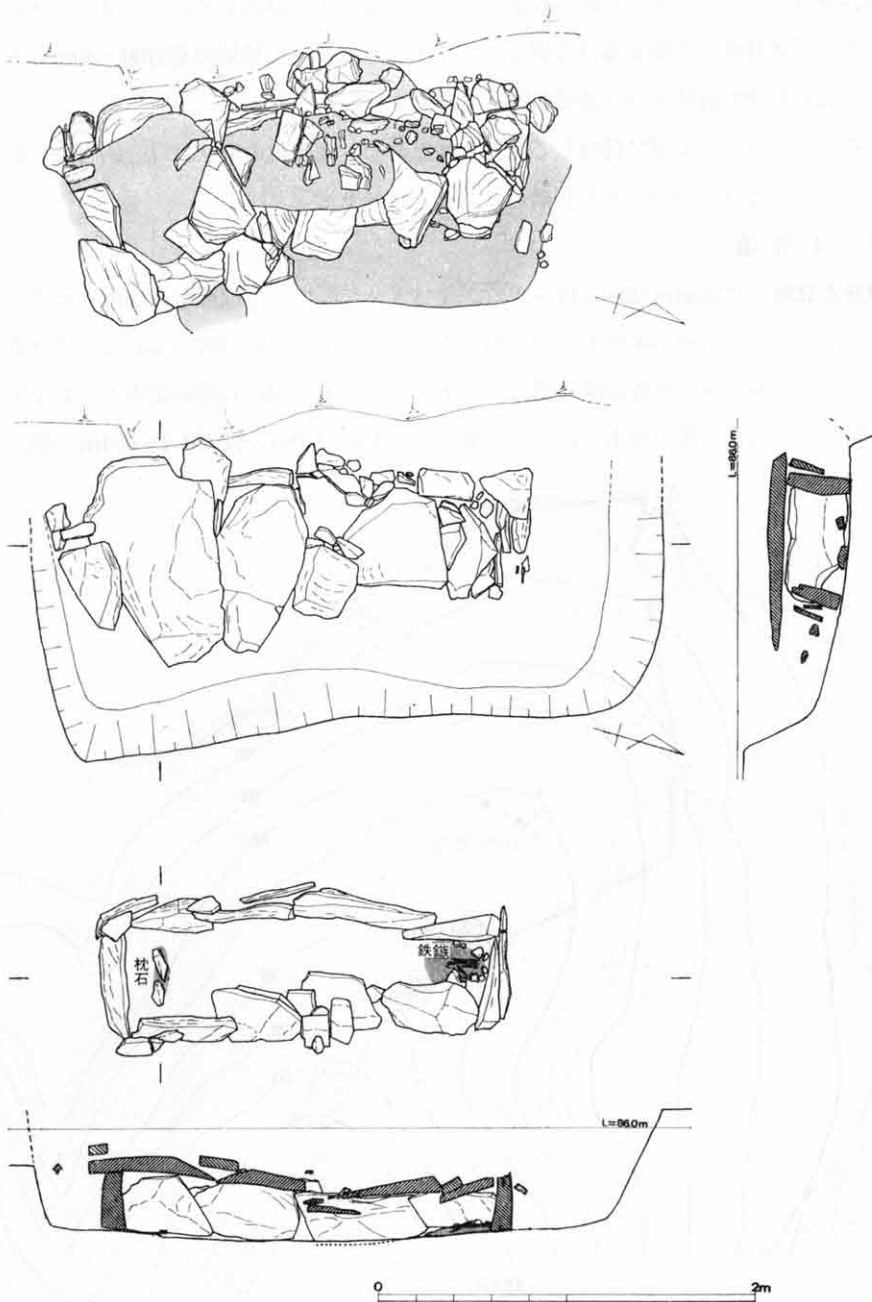
(1) 4号墳

墳丘と立地 標高86m付近に位置する。発見された時は、墓埴西半分が削り取られ、棺材が露出し、また石棺の東側も一部掘削が入り、その土砂が周辺につまれている状態であった。そのため墳丘、外表施設に関しては不明な点が多いが、石棺の南東方でL字型に石棺を囲むように走る溝を検出した。この溝は、幅0.8～1.0m、深さ0.2～0.4mを測り、溝



第3図 薬王寺古墳群分布図

内からは、須恵器甕が破碎された状態で出土しており、墳丘部を画する溝の可能性はある。また石棺長軸ラインの土の堆積状態から、墳丘は若干の盛土を行って築造されていることがわかった。



第4図 4号墳石棺実測図(スクリーントーン部は粘土)

埋葬施設 墓坑は、墳丘の西半分が工事のため削り取られていたため不明な点が多いが、その規模は、長さ3.3m、幅1.6m(現存幅)、深さ0.75mを測る。

石棺は、この墓坑の中に直接棺材を立て並べた上に蓋石を架ける組合式の箱式石棺である。主軸は南北方向にあり、方位はN16°Wである。棺材を据えるために坑底をさらに掘り下げる作業は見られない。棺材は、暗褐色を呈する片岩で、両長側石4枚ずつ、両木口石1枚ずつ、蓋石5枚?で構成される。東側石は、土圧等によって内傾しているが、西側石はほぼ垂直に立つ。南木口石は、側石の外側に、北木口石は内側にそれぞれ据えており、また側石も南から北に向かって棺の幅が狭くなってゆく棺材の組み方をしている。蓋石は一部が棺内に落ち込んでいたが、蓋石間の接合面には、同様の板石を数枚配置したり、また粘土で目貼りを行うことによって、蓋石の安定・棺の密封を図っている。蓋石は、その重なり具合から考えて、北から順に架けてゆき、南端に一番大きな板石(長さ1.1m×幅0.4~0.75m、厚さ0.15m)を配置している。

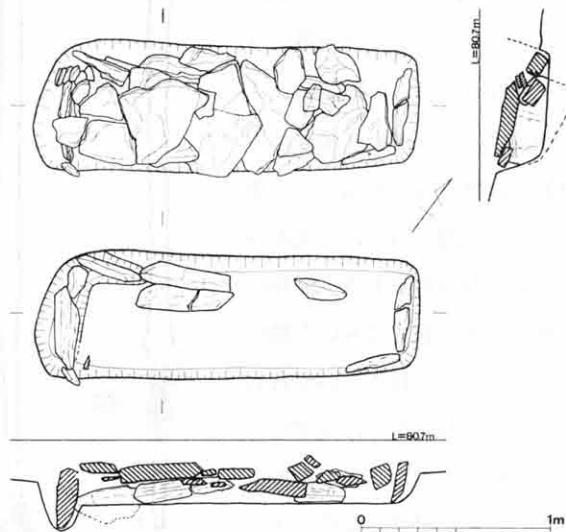
棺底には、板石・粘土等による床の形成は認められない。ただ、北木口石とそれに接する東西の両側石の計3枚で「H」字形に画された部分には、棺底に2~5cm程の自然石と黄白色粘土で一種の床面を作り、その上に鉄鎌(19本か?)がまとめて置かれていた。また南木口石近くには2個の自然石があり、黄白色粘土で安定させており、棺の構造から頭位が南と考えられるため、この石は枕石と推定される。

棺の内法は、棺底で長さ1.92m、北木口幅0.52m、南木口幅0.60m、上端から棺底までの深さは0.3~0.4mを測る。

(2) 5号墳

墳丘と立地 標高81m付近の丘陵上に立地する。石棺のみが残り、周辺は工事のため削平され、平坦な斜面となっていた。そのため墳丘・外表施設に関しては不明である。ただ、1~4号墳に認められた墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が強い。

埋葬施設 埋葬施設は、蓋石・側石・木口石から構成さ



第5図 5号墳石棺実測図

れる組合式の箱式石棺である。墓坑は、長さ2.0m、中央部幅0.64m、確認面からの深さ0.15~0.25mの規模をもつ。坑底においては、さらに南木口石及びそれと接する西側石の2枚の棺材を据え置くためにL字型の溝を穿っている。

石棺は、南北方向に主軸をもち、方位は N35°E である。棺材は、4号墳と同様の片岩で加工痕は認められない。蓋石は、4~5枚の板石を北から順に据えて、南端に一番大きな板石を配している。粘土による目貼りは認められない。棺の側壁をなす木口石・側石は、前者は1枚ずつで構成されるが、後者は一部しか検出することができず、その石の配置は今一つ明らかでない。ただ蓋石を除去した段階で、棺内部に倒れこんでいた側石も少なく、もともと四周を完全に板石を立て並べて組んでいた可能性は少ない。

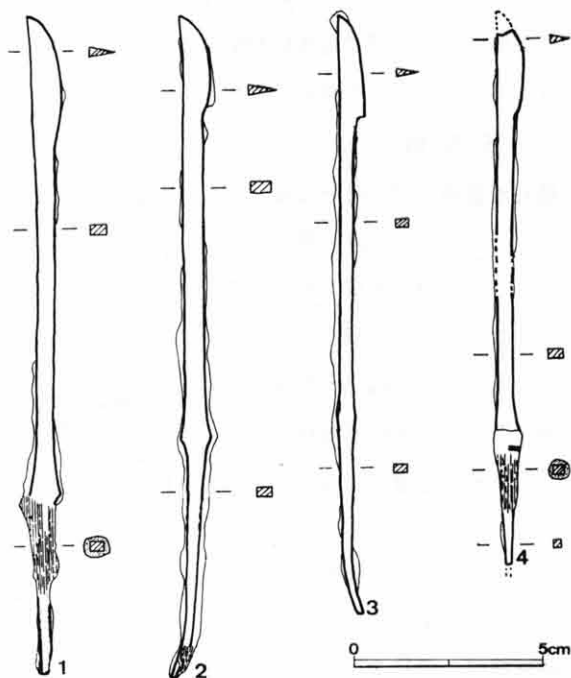
棺底には、板石・粘土等による床の形成は認められず、また棺内・墓坑から遺物は出土していない。

棺の規模は、棺の側壁部に関して今一つ明らかでないため、推定した数値も入るが、内法は、棺底で、長さ1.65m、北木口幅0.4m、南木口幅0.55m、また上端から棺底までの深さ0.2mを測る。頭位は棺の構造から南と考えられる。

3. 出土遺物

遺物は、4号墳の墳丘を区画する溝から破砕された須恵器甕が、また、4号墳の棺内からは鉄鏃(19本?)が一束になって出土している。ここでは鉄鏃のみを一部取り上げる(第6図)。

鉄鏃は、すべて棘筩被鏃の片刃箭式に属する。断面は、刃部が長い二等辺三角形、筩被が長方形、茎が方形である。鏃身の形態は、関を有するものと無いものに分けられる。いずれも柄に装着されており、茎部には木質が残る。また、4の筩被には木質の上に樹皮が残る。4の鉄鏃から径0.8cm前後の竹と思



第6図 遺物実測図

われる柄に装着し、柄の上に樹皮を巻いて固定していたと考えられる。

4. 小 結

これまでの薬王寺古墳群の調査によって得られた知見・問題点を整理して結びとしたい。

- ① 薬王寺古墳群は、5基(以上)の古墳から構成されることがわかった。
- ② 4・5号墳は、当初予想できないような丘陵の急傾斜地に立地しており、さらに4・5号墳の上にも古墳・埋葬施設が存在する可能性がある。
- ③ 墳丘は、斜面の上方に溝をめぐらし、斜面下方に盛土して墳丘を築造する方法が、ほぼ共通してみられる。そのため外観からは、古墳と認識し難い場合が多い。
- ④ 埋葬施設は、石棺・木棺という棺材のちがいはあるものの、一段の墓壇の中に組み合わせて棺を構成する直葬系のものである。
- ⑤ 4号墳を除いて、墳丘をもつものは、一墳丘に複数の埋葬施設が見られること。
- ⑥ 墳丘の規模・立地、副葬品の量・質から1号墳の優位性が窺える。特に1号墳第1主体部からは、土器類とともに鉄製馬具・直刀・鎌・刀子が副葬されており、他の主体部に比べ優る。
- ⑦ 出土した遺物は、6世紀初頭～前半代に属するものである。

(山下 正=当センター調査課調査員)

注1 山城考古学研究会編『丹波の古墳Ⅰ—由良川流域の古墳—』1983

注2 後藤守一「上古時代鉄鎌の年代研究」『人類学雑誌』54-4 1939

古墳No	墳形と規模	埋葬施設	棺の規模 (内法)	墓壇の規模	遺物とそのあり方
1号墳	方墳 東西 10m 南北 10m	第1主体部 組合式木棺 両木口に礫混り粘土塊を配する。	長さ 2.6m 幅北木口0.85m 南木口0.85m	5.6m×2.8m 深さ 0.5m	墓壇上 須恵器杯身・蓋, 高杯, 短頸壺, 土師器甕 棺上? 鉄製品: 馬具轡(1), 直刀(1), 鉄鏃(4), 刀子(1)
		第2主体部	1.45m×0.55m 深さ 0.3m		遺物なし
		第3主体部 組合式木棺	長さ 3.9m 短辺 1.1m	5.1m×2.2m 深さ 0.4m	墓壇内 須恵器杯 棺内 須恵器杯身・蓋(転用枕か?) 鉄鏃(4)
2号墳	円墳 東西 8.0m 南北 8.5m	第1主体部	2.65m×1.45m 深さ 0.3m		棺上? 須恵器甕 (or 棺内)
		第2主体部 組合式木棺 両木口には, 礫混り粘土塊を配する。	長さ 2.6m 幅北木口 0.4m 南木口 0.5m	4.9m×1.8m 深さ 0.5m	墓上 須恵器甕 墓壇上 須恵器杯蓋 墓壇内(棺内) 須恵器杯身・蓋(3セット), 刀子(1) 棺内 管玉(1)
3号墳	方墳 東西 4.8m 南北 5.0m	第1主体部 組合式箱式石棺 側石, 底石, 蓋石より構成されるが, 蓋石は, すでに抜き取られていた。	長さ 1.62m 幅北木口0.45m 南木口0.45m	2.2m×0.7m 深さ 0.4m	遺物なし
		第2主体部 組合式箱式石棺 側石, 底石, 蓋石より構成されるが, 蓋石は, すでに抜き取られていた。	長さ 1.62m 幅北木口0.37m 南木口0.39m	2.1m×0.8m 深さ 0.5m	遺物なし
		—	—	—	周溝内 土師器壺, 埴壇 墳丘裾 須恵器甕
4号墳	円墳? 南北 10m 東西 ? 高さ ?	組合式箱式石棺 側石, 蓋石より構成	長さ 1.95m 幅北木口0.52m 南木口0.60m	3.3m×1.6m以上 深さ 0.75m	棺内 鉄鏃(19本?) 周溝 須恵器甕
5号墳	墳丘なし?	組合式箱式石棺 側石, 蓋石より構成	長さ 1.65m 幅北木口 0.4m 南木口0.55m	2.0m×0.64m 深さ0.15~0.25m (確認面より)	遺物なし

付表1 薬王寺古墳群調査の概要

昭和60年度発掘調査略報

1. 下畑遺跡

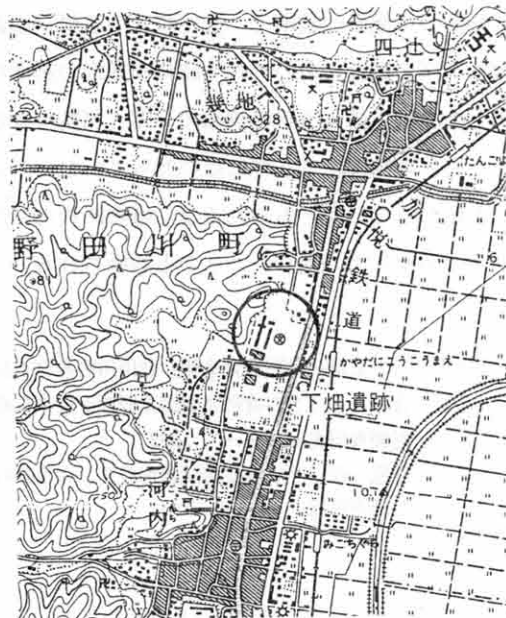
所在地 与謝郡野田川町字三河内810
 調査期間 昭和60年5月20日～7月19日
 調査面積 約260㎡

はじめに 今回の発掘調査は、下畑遺跡が存在する府立加悦谷高等学校の校舎新築工事に伴う調査である。

下畑遺跡が所在する野田川町は丹後半島の基部に位置し、町内の中央部には野田川が縦貫し、加悦町・岩滝町域を含む流域には、加悦谷と呼ばれる小平野が形成されている。当地域は古くから開け、弥生時代の銅鐸が出土した比丘尼城遺跡・須代神社遺跡をはじめとして、全長145m・後円部径115m・後円部高14mの規模をもつ日本海側でも有数の前方後円墳である蛭子山古墳等、数多くの遺跡が存在している。この加悦谷地域は遺跡の分布密度も高く、丹後地域の中でも一つの中心的な地域であったと判断される。

下畑遺跡は、昭和47年に実施された府立加悦谷高等学校の体育館新築工事に伴い、工事中偶然に発見された遺跡である。^(注1) 弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物が、当時の調査により出土している。その後、^(注2) ^(注3) 当遺跡は昭和56年・57年の2回、校舎改築工事に伴う発掘調査を当調査研究センターが実施している。昭和57年の調査では、鎌倉時代の木枠組の井戸1基を検出し、井戸内および井戸掘形部分から多量の黒色土器と木製の下駄・はし・漆器椀・杓子状木製品等が出土している。

調査の概要 調査地は体育館の東隣りに位置している。この体育館は丘陵を削平して建設されており、調査地は



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

丘陵裾部分にあたる。

調査の結果、調査地西端部では地表下約50cmで黄灰色粘質土の地山面を確認した。地山上層には暗茶褐色粘質土(弥生時代の遺物包含層)が認められた。この遺物包含層は調査地西部にしか存在せず、中央部以東では灰色系の砂層と粘性砂層が厚く堆積していた。この砂層中には黒色土器等の遺物を多数包含していた。それらの遺物包含層は西から東方向に下り傾斜を持っており、調査地東端での地山面は地表下約1.8mと深く、黒色土器を包含する砂層は約1mの堆積を持っていた。

今回の調査では、鎌倉時代以降の溝と杭列のほか、弥生時代の溝と墓塚とみられる土塚を検出した。弥生時代の墓塚は掘形全長約3.8m・幅約1.8m・深さ約60cmを測り、棺部分は全長約2.3m・幅約0.5mの規模であった。また墓塚に隣設して直角に曲る溝の一部を検出し、その溝中より把手付壺と甕の出土をみている。

出土遺物には弥生時代の土器のほか、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代から鎌倉時代にかけての黒色土器・土師器・須恵器・輸入陶磁器等の破片がみられる。また、北宋銭の一つである政和通宝(1111~1117)が1枚出土しているほか、木製下駄の片方(右足用)の出土もみている。

まとめ 今回の調査では、当初予想された平安時代から鎌倉時代の集落に伴う遺構の検出はみられなかった。ただ、土層の堆積状況等からみて、当時の調査地周辺は水田として使用されていた可能性が高い。

昭和47年調査の段階で、弥生時代の遺構が調査地近辺に存在するものと推察されていたが、今回の調査において弥生時代中期末の遺構を確認したことは大きな成果であった。検出した墓塚と溝は方形周溝墓の一部と判断できるが、調査地の端部で部分的な検出でもあることから確定するまでにはいたっていない。もともと弥生時代の遺構等は調査地の東部にも広がっていたとみられるが、鎌倉時代あたりの段階で遺物包含層とともに遺構も東方からの開墾により削られたものと判断される。

(竹原 一彦)

注1 『下畑遺跡発掘調査略報』野田川町教育委員会 1972

注2 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注3 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

2. 仁 田 城 跡

所在地 福知山市大字宮小字城山
調査期間 昭和60年6月27日～8月23日
調査面積 約200㎡

はじめに 当調査は、近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴う事前調査である。

仁田城跡は、土師川の左岸の低位段丘上に立地し、土師川と竹田川の合流点を中心とした平野を見渡すことのできる眺望の優れた場所に位置している。この城跡は、『丹波志』巻四、天田郡古城部に記事がみえ、また『日本城郭大系』11においても「宮城」として記載されている。城郭全体の遺存状態は非常に良好なものであったが、調査は工事区間の関係で、城跡の東側の空堀及び土塁の一部にとどまった。同時に地形測量も並行して行った。

調査概要 地形測量によると、主郭部は、東西約30～33m、南北は、谷側で約50m、山側で約30mを測る台形状を呈する。土塁及び空堀は、西側を除く3面に設けられている。特に北側部では、カギ形に屈曲部を設けるいわゆる横矢掛けをなしている。土塁の大きさは、上部幅約1.4m、下部幅約8mである。空堀底部から土塁上面までの高さは、最大約4.4mを測る。調査した空堀部は、肩の幅5～6.7m、底面の幅2～3.2mで逆台形を呈している。底部から肩までの深さは約1.4mを測る。空堀部からの出土遺物は、瓦器片・青磁片・近世瓦などであるが、14～15世紀と思われる陶器・染付けの破片を数点検出した。

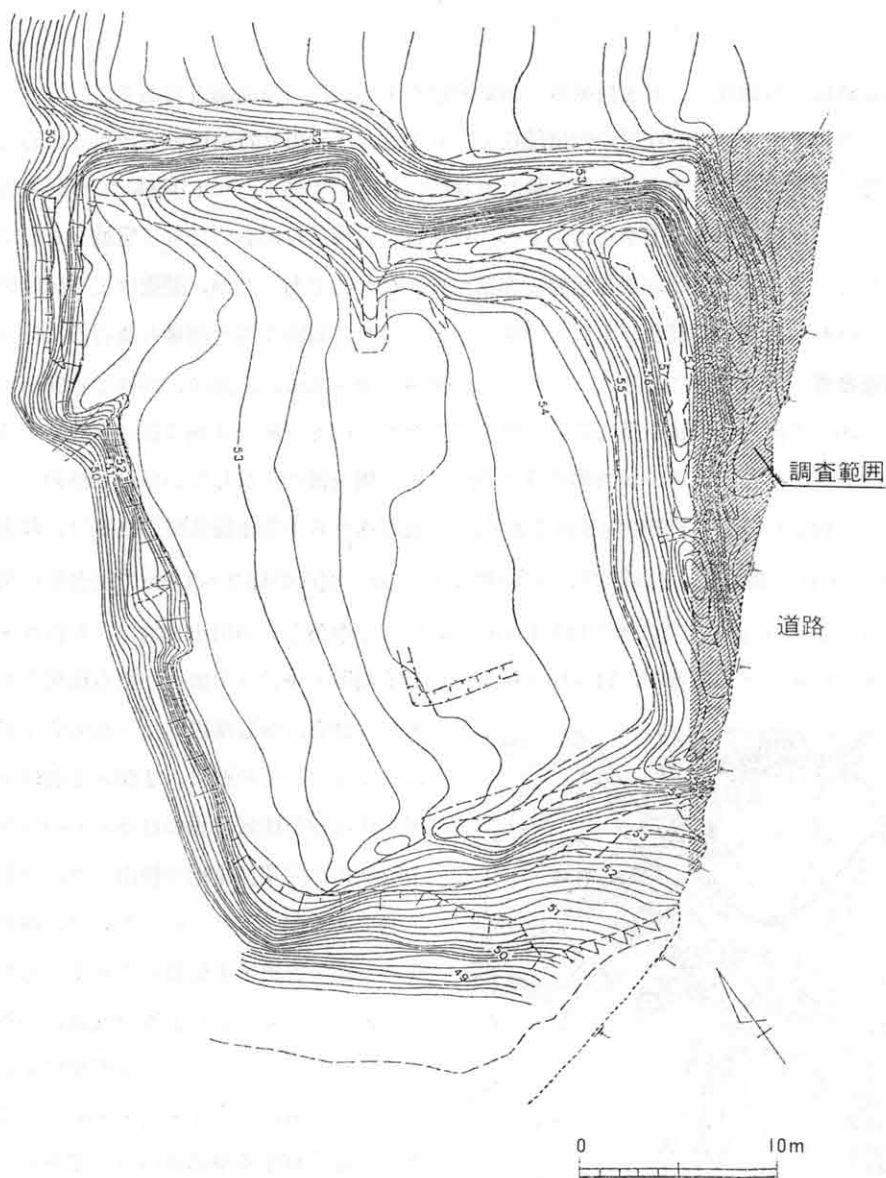


第1図 調査地位置図 (1/50,000)

また、調査は空堀部以外に一部外側平坦地にも及んだ。その結果、2間×2間以上の掘立柱建物の柱穴と思われるもののほか、十数個の小穴及び土塚を検出した。詳細は不明であるが、これらの中からは、鎌倉時代の瓦器・青磁・土師器などが出土した。

まとめ 今回の発掘調査は城跡の一部に留まったが、判明したことを簡単にまとめてみたい。城跡は、北・南・東の三方に土塁、空堀を有する単郭式のものである。西側は急峻な崖面をなし、防御的な土塁等を

要しなかったと考えられる。郭内は調査対象外であり、全く不明である。恐らく、城の形状、規模からみて「館」的な様相を呈していたものと考えられる。城の構築時期は、現在戦国時代と考えている。それ以前の鎌倉時代でも周辺も含め何らかの建物等があった。これは、近接する大内城跡の変遷と共通しており、関連が注目される。また、同地周辺には多保市城跡・田野城跡が所在し、城館が多いことも注意される。(藤原 敏晃)



第2図 仁田城跡地形測量図

3. 長岡京跡左京第124次 (7ANENR 地区)

所在地 向日市鶏冠井町西金村5番地
 調査期間 昭和60年5月8日～8月15日
 調査面積 約538㎡

調査概要 今回の調査は、向日町簡易裁判所庁舎等新営工事に伴う事前の発掘調査である。裁判所予定地は全体で約2,280㎡におよぶが、発掘調査は建物部分を主な調査対象地として実施した。

調査地は長岡京跡の左京二条三坊八町に当り、近接して東側には東三坊坊間小路が予想される。また、この地は長岡京の中心である宮域の朝堂院・内裏の真東に位置する。

今回の調査地の約30m南側において、昭和59年に行われた舞鶴倉庫建設に伴う調査では、長岡京期の遺構は検出されなかったが、弥生時代中期の溝が1条確認されている。さらに西側の国道171号線の立会調査においては、縄文式土器が出土していることから、鶏冠井遺跡及びそれ以前の遺跡の範囲に該当することが予想される。

調査は、昭和60年5月8日から建物予定地512㎡を重機にて掘削を開始した。当掘削地は厚いコンクリートと盛土・耕作土等を除去し、人力により精査を行ったところ、南北に走る中世素掘溝等の遺構を検出した。中世の遺構面を約10cm掘削して、長岡京期の土坑・

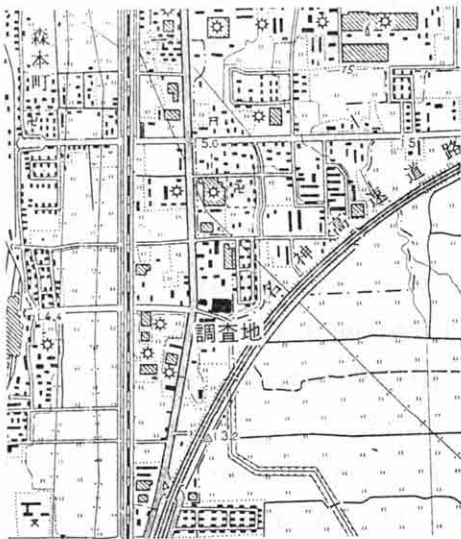
溝・柱穴等を検出した。さらにこの面の精査を繰り返すことにより、下位の弥生時代の住居跡・柱穴等を確認した。

検出遺構 今回の調査により検出した遺構は、大きく分けると3分類される。南北方向の中世の素掘溝群と長岡京期の土坑・溝・柱穴群、弥生時代中期の円形住居跡・土坑・柱穴群等である。

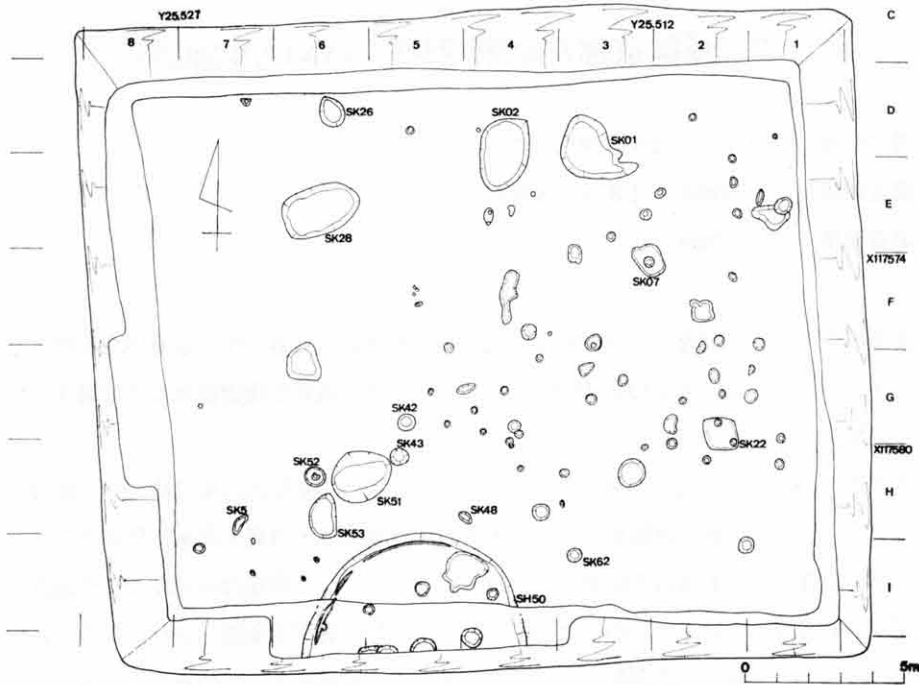
・中・近世の遺構

中世素掘溝 SD01～SD15

素掘溝は総数が12条を数えるが、すべて南北方向に走るものである。規模は長いもので全長約22mを測る。幅は約0.4m、深



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 遺構平面図

さ約0.2mを測る。埋土は灰褐色粘土の単一層である。出土遺物は、瓦器椀・土師器皿片等がある。

・長岡京期の遺構

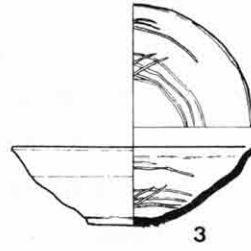
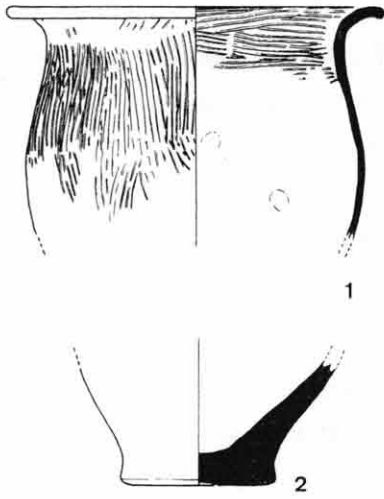
土坑 SK01 この土坑は平面形態が半月状の不定形を呈するものである。規模は長さ約2.7m・幅約1.7m・深さ約0.1mを測る。埋土は、青灰褐色粘土の単一層である。

土坑 SK02 この土坑は土坑SK01の西側に近接している。平面形態は楕円形を呈している。規模は長径が約2.2m・短径約1.6m・深さ約0.2mを測る。埋土は青灰褐色粘土の単一層であるが、炭と焼土を多く含んでいた。出土遺物は、土師器片・須恵器片・瓦片等が出土した。

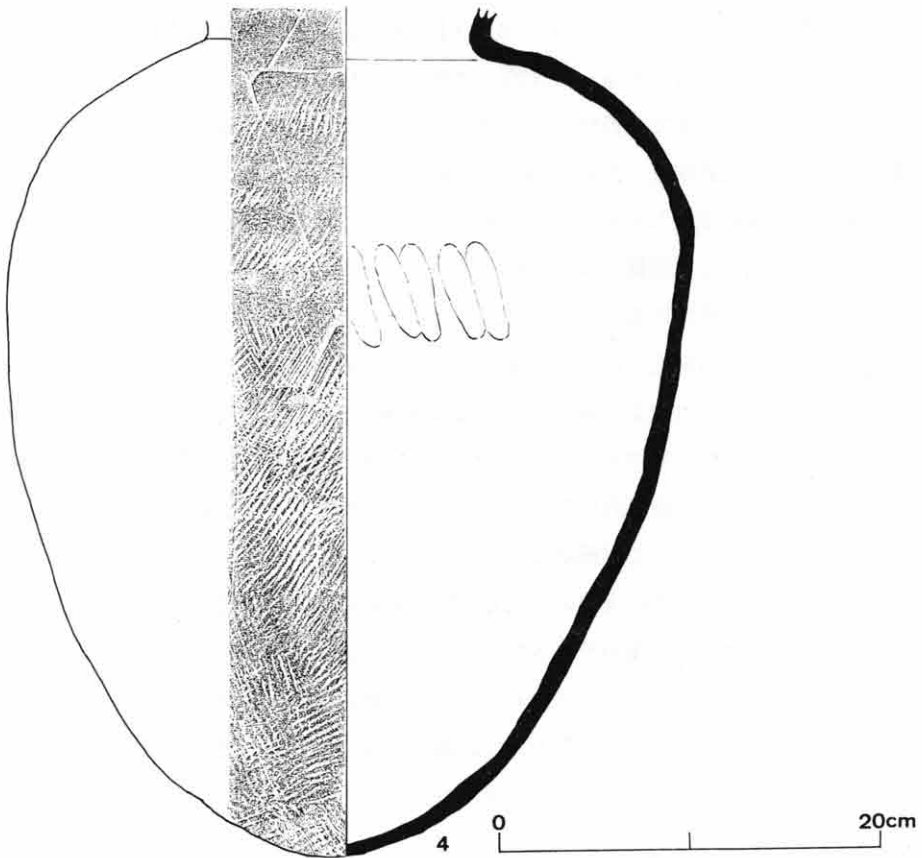
溝 SD03 南北方向に走る溝であるが途中で切れている。規模は幅約0.5m・深さ約0.2mを測り、長さ約8mを確認している。埋土は青灰褐色粘土の単一層である。出土遺物は認められなかったが、直径約5cmの円礫の石が散乱した状態で含まれていた。

柱穴群 長岡京期の柱穴は全体の柱穴群の中でも少数である。平面形態は方形を呈するものと円形を呈するものがある。規模は方形のもので一辺が約0.6m・深さ約0.2mを測る。円形のもの直径が約0.5m・深さ約0.2mを測る。埋土は青灰褐色粘土層である。

・弥生時代の遺構



1. 土埴SK52出土
2. 竪穴式住居跡SH50出土
3. 溝SD15出土
4. 土埴SK01出土



第3図 出土遺物実測図

竪穴式住居跡 S H50 この住居跡は直径が約8mと推定される円形住居跡である。住居には直径約0.3mの柱穴が3か所確認された。規模は確認される最大直径が約6.5m・深さ0.2mを測る。埋土は暗茶褐色粘砂質土層である。約1cm大の炭が含まれている。出土遺物は弥生時代中期前半の壺・甕・石器・サヌカイトの剝片が出土した。

土坑 S K51 竪穴式住居跡S H50の北西に隣接している土坑である。平面形態は楕円形を呈する。規模は長径約2m・短径約1.5m・深さ約0.5mを測る。埋土は暗茶褐色粘土と暗茶色細砂質土、暗灰色粘土の3層からなり、埋土中には炭を多く含んでいる。出土遺物は弥生時代中期前半の壺・甕を約4個体分検出した。

土坑 S K52 土坑S K51の西側に隣接している土坑である。平面形態はほぼ円形を呈する。規模は直径約0.6m・深さ約0.3mを測る。埋土は暗茶褐色粘土の単一層である。出土遺物は弥生時代中期前半の甕が出土した。

出土遺物 出土遺物には、縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦等があるが、全体に量は少ない。この中でもっとも注目すべきものとしては土坑51、住居跡50から出土した弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)の土器群と長岡京期の土坑01・02から出土した須恵器甕、土師器、瓦等がある。時代的には弥生時代中期前半と長岡京期、中世の遺構内から出土したものが大半で、遺物包含層内から出土したものは少量である。

まとめ 今回の調査地は、長岡京跡左京二条三坊八町の推定地にあたりとともに、弥生時代の集落跡が確認された鶏冠井遺跡の範囲に該当する可能性が高い場所である。

今回の調査で検出した遺構には3時期にわたっているものであるが、中世以前の長岡京期と弥生時代との遺構は重複したものであった。中世の時期においては、この地が南北方向の多数の素掘溝から南北方向に長い耕作地である長地型に利用されていたことが判明する。長岡京期については南北方向に検出した溝S D03が東三坊坊間小路の西側溝と当初予想されたが、溝が南側に続かずに途切れている点や溝の両側に長岡京期の柱穴が確認できることから東三坊坊間小路以外の何らかの溝と判断した。また、長岡京期の柱穴を数か所で検出したが、建物跡としては確認できなかった。

弥生時代については、前回までの鶏冠井遺跡の調査において多数のピット、溝内からの遺物の出土等から集落の存在が予想されていたが、住居跡は確認されていなかった。今回検出の円形住居跡は北側半分だけであるが鶏冠井遺跡の範囲の広がりや、この地に中期前半の集落の存在が確認されたことは大きな意義がある。さらに乙訓地方においてもこの時期の住居跡の発見はこの地域の弥生時代を知る上で大きな役割をはたすものである。

(村尾 政人)

4. 長岡京跡右京第193次 (7ANNKN-2 地区)

所在地 長岡京市友岡1丁目1-1
調査期間 昭和60年7月5日～8月22日
調査面積 約400㎡

はじめに この調査は、府立乙訓高等学校の校舎新築工事に伴うものである。乙訓高校の東端は現在の道路面より3m前後高くなっている。これは、学校ができる以前、長岡競馬場が造られたとき、西方の段丘を削り東方に盛土したためであろう。それ以前は、谷状の地形であったことが古い地図等から知ることができる。

調査地は、長岡京跡の右京六条十二町にあたり、六条大路の北側溝が推定される地点に位置する。東方約100mの右京第135・143次調査では長岡京期の掘立柱建物跡や柵列等が検出されている。また、北東部の調査で長岡京期の井戸(111次)、中世の井戸(111・142・149次)や古墳時代～中・近世の遺物等各時期のものがみついている。これらのことから、長岡京～中・近世の遺構等が予想された。

調査概要 調査地に28.5×14mの長方形のトレンチを設定し、コンクリート・盛土を重機によって掘削することから開始した。盛土は3～3.6mと厚く、その下が旧水田の耕作土と砂礫を含んだ褐色土・暗褐色土となる。これより下は土混じりの砂礫層となる。

トレンチ東南部で、砂礫を含んだ黒褐色土の長さ約2m、幅1m前後、深さ20～40cmの土坑を検出したが遺物は殆ど見られなかった。このため、排水溝兼断ち割りを入れたところ、北方で黄色粘土層・南方で黄褐色砂質土層が見つかった。黄色粘土層は固く締まっており、ほぼ地山と思われる。この黄色粘土層を削り込むように溝状の凹みがあり、黄褐色砂質土層との間に幅6～8mの自然流路が東西方向に走る。

出土遺物には、軒丸瓦、須恵器蓋などがある。須恵器の蓋は端部が屈曲する。長岡京期に多く見られ、いずれも二次的な堆積による。

おわりに 今回の調査では、時期の明瞭な遺構は検出されなかった。削平されていない段丘の東側では今後の調査で遺構の検出が期待できる。(石尾 政信)



調査地位置図 (1/50,000)

5. 長岡京跡右京第194次 (7ANKNT-2 地区)

所在地 長岡京市開田三丁目

調査期間 昭和60年6月19日～8月2日

調査面積 約 85㎡

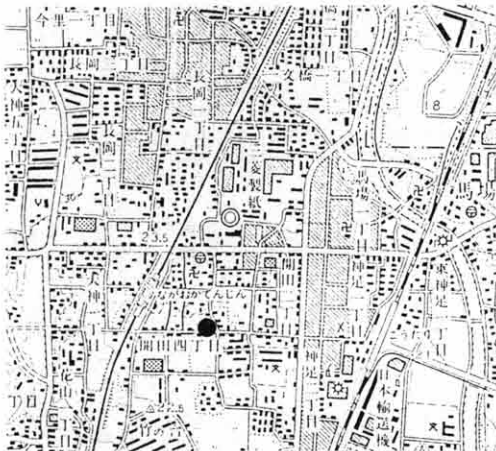
はじめに 長岡京市における開田地区とりわけ五条大路周辺は、長岡京期はもとより弥生・古墳・中世の遺跡が集中する。当調査研究センターでは京都府乙訓土木事務所の依頼を受け、府道開田神足停車場線の拡幅工事に先立ち、昭和58年度以来、継続して発掘調査を実施してきている。今回の調査地は、長岡京跡条坊復元図によれば六条二坊八町・九町に推定され、条坊では西二坊坊間小路が調査地内を通っている。

調査概要 調査地の掘削は、盛土・旧水田耕土・床土を重機にて除去した後、人力掘削に切り替えた。旧水田床土に続いて中世および長岡京期の遺物包含層が存在し、これらの下層に暗茶褐色粘質土の長岡京期の遺構面を検出した。遺構面は上・下層に分かれ、共に長岡京期に該当するものと言える。上層からは非常に幅の広い溝状遺構を1条、下層では掘立柱建物跡・柱穴・溝(2条)を各々確認している。そして、この下層から検出した東の2条の溝が、西二坊坊間小路の東西両側溝になろう。西側溝は幅約2.5m、深さ約57cmを測り、埋め土は主に淡茶褐色細砂である。遺物は土師器皿・杯、須恵器杯蓋などが出土している。東側溝は幅約1.1m、深さ約28cmで、埋め土は暗茶褐色粘土である。遺物は西側と比較して僅少であった。なお、両側溝の溝心間距離は8.6mである。掘立柱建物跡は、

恐らく2間×3間になり、柱穴は真東西の軸線上に並んでいる。

まとめ 西二坊坊間小路の東西両側溝の規模と内容が明らかとなった。また、長岡京期のより新しい時期に幅広い溝が掘り込まれ、ここに多量の遺物が廃棄された様である。五条大路との交差点に極めて近い所だけに、西二坊坊間小路との関係と併せて、各々の遺構の出現と消失について慎重に検討していきたい。

(黒坪 一樹)



調査地位置図 (1/25,000)

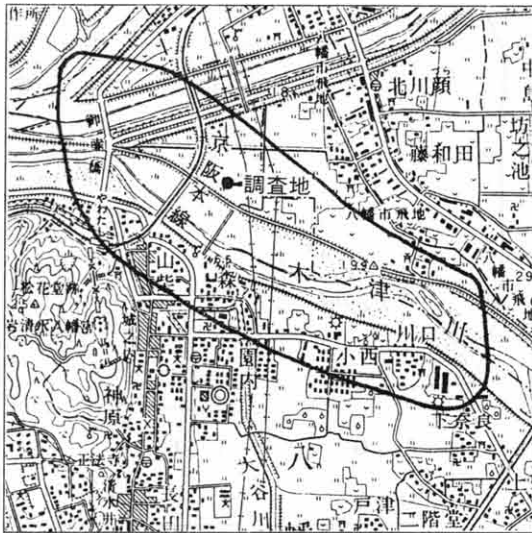
6. 木津川河床遺跡

所在地 八幡市八幡一丁目
 調査期間 昭和60年4月23日～7月31日
 調査面積 約800m²

はじめに 木津川河床遺跡は、宇治川と木津川が合流する付近から木津大橋にかけての木津川河床を中心とする遺跡である。木津川河床からは、弥生時代～近世にわたる遺物が採集されるだけでなく、古墳の存在も認められているが、遺跡の実態は不明であった。ちなみに、現在の木津川は明治2年の改修により、大幅に流路が変えられたものである。

本遺跡内に、木津川流域下水道洛南浄化センターの建設が予定され、それに先立って昭和57年度より当調査研究センターが発掘調査を実施しており、部分的な様相ではあるが、徐々に明らかになっている。特に昭和58年度の管理本館新築に伴う発掘調査(以下「管理棟下調査」)では、竪穴式住居跡10基をはじめとして土壇・掘立柱建物跡など、古墳時代後期の集落跡が確認されている。今回報告するのは、本年度調査3か所のうち、管理棟下調査地西側約50mにある汚泥脱水機棟新築予定地の発掘調査の概略である。

検出遺構の概要 今回の調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡3基、土壇1基、素掘り溝、柱穴群である。以下、その概要を記す。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

SH01は、南北2.8m、東西3.3mの竪穴式住居跡で、検出高は約10cmである。後述のSH02・SH03が、それぞれカマドを有するのに対し、これはカマドをもたない。住居跡の軸は、ほぼ南北に一致している。

SH02は、その軸を北東—南西にとる住居跡である。短辺3.1m、長辺5.0m、検出高20cmを測る。東北隅に長さ130cm、幅26cmのカマドが設けられている。カマドを有する住居跡は管理棟下調査においても検出されているが、それらは住居の各々

の辺の中央付近に設けられており、このSH02のタイプは初めてである。

SH03は、SH02と同一方向に軸を持つ。短辺2.75m、長辺4.2m、検出高15cmを測る。西辺のほぼ中央に、30×125cmのカマドを有する。西辺の一部と南辺に沿って壁溝が検出できた。

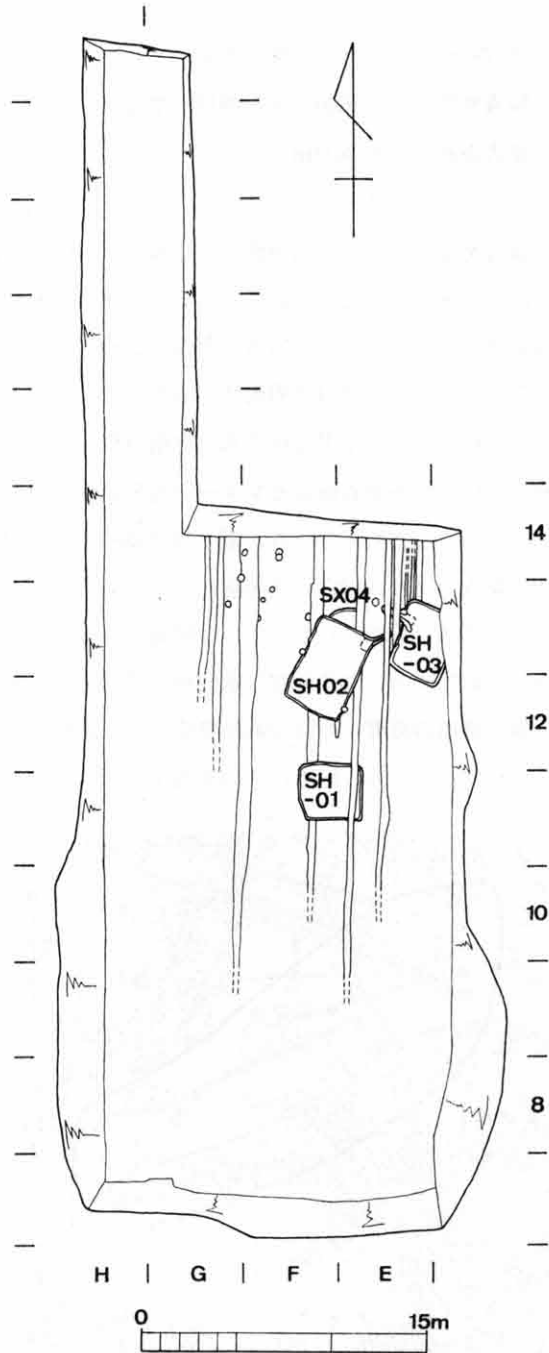
SH01～SH03は若干の時期差をもつが、古墳時代後期のものである。また、床面における主柱及び支柱は、これら3基の住居跡からは検出されなかった。

SX04は、SH02と重複しているもので、古墳時代前期の土壇である。内部より高杯、壺(口縁部)が比較的まとまって出土した。

その他、南北方向、東西方向の素掘り溝を検出した。出土遺物が少なく、時期比定は困難であるが、大まかに中世の時代区分が与えられるものである。

まとめ 木津川河床遺跡内の調査は、今年で4年目でありこれまでの調査成果を基礎に若干のまとめをあげておきたい。

集落として考えた場合、管理棟下調査地は、住居跡の分布密度から集落内の「集住区」に相当するものと判断される。今回の調査で検出された住居跡は、調査地東北部のみであり、ここが「集住区」の西端と考えられるが、集落全体としてはさらに広がる可能性もあり、より詳細な検討を加える必要がある。 (岩松 保)



第2図 検出遺構図

資料紹介

木津川河床遺跡出土の円窓付土器

田代 弘

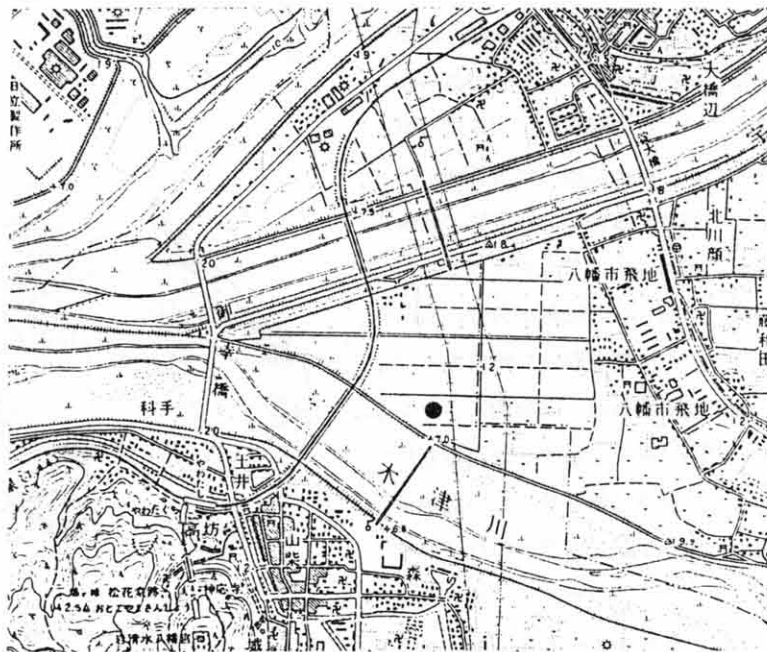
1. はじめに

木津川河床遺跡は、京都府八幡市に所在する弥生時代後期から室町時代にわたる複合遺跡である。遺跡は、木津川大橋から御幸橋に至る木津川の河床約4キロの広大な範囲にわたり、多数の遺物の散布が確認されている(第1図)。

当調査研究センターでは、木津川流域下水道浄化センター建設工事に先立って1982年度から継続して当該遺跡の発掘調査を実施しており、多くの成果をおさめつつある。1982年度の調査では、古墳時代前期の資料を中心に弥生時代後期から中・近世にわたる遺構・遺物を検出し、1983年度には弥生時代終末から古墳時代にかけての多量の土器を含む沼状遺構をはじめ、古墳時代後期の竪穴式住居跡10基などを確認した。1984年度は中世の素掘溝が中心であり遺構は希薄であったが、今年度の調査では、1983年度と一連のものと考えら

れる古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出している。

紹介する資料は、1983年度調査において検出した土器溜りから出土したものである。概要報告は既に行っ
(注1)
ているが、その後整理を継続したところ、



第1図 1983年度調査位置図(●印)(1/30,000)

概要作成段階では確認できていなかった接合資料を新たに確認するところとなり、事実関係について若干訂正する必要が生じた。そこで今回、改めて検討したいと思う。

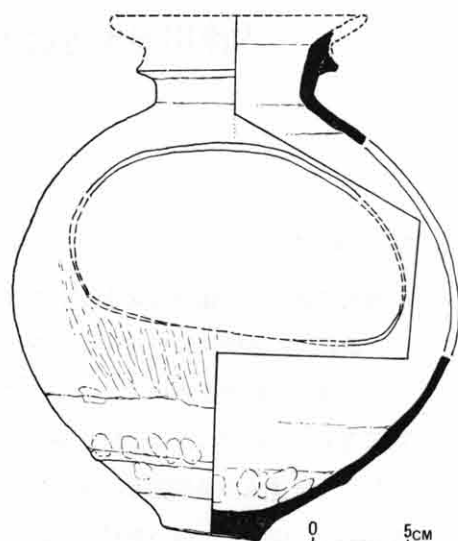
2. 遺物について

当該土器は、概要報告書中に示した土器実測図48にあたり、体部中央に最大腹径をもつ壺形土器である。肩から胴部にかけて穿孔がみられ、円窓付土器と呼ばれる外来系の土器に相当する(図版2・第2図)。

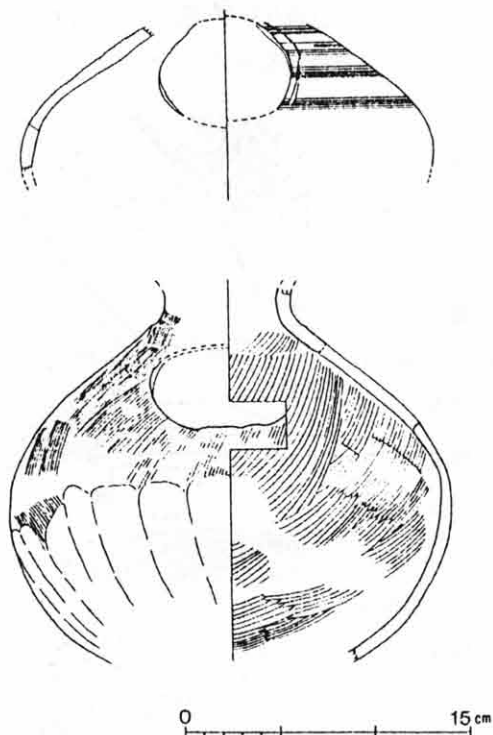
口頸部は残りが悪かったが、口縁内面の傾斜部分と頸部の突帯の一部を手掛りに第2図のように復元した。

頸部は、短い円筒状を呈し、口縁に至り外反する。頸部と口縁部の境目には、断面三角形の突帯が貼り付けられている。二重口縁の下端部を突帯によって形成したものと考えられるが、通常の二重口縁ではなく、それを擬したために生じたものであろう。体部下半には分割成形による接合痕をとどめる。接合に際しては外面から粘土紐を補填するため、隆带状の痕跡を残す。底部は小さな平底をなし、やや凹状で、削り状の痕跡がある。底部成形時に粘土を掻き取った跡であろう。

調整は器表外面を部分的にヘラミガキ、内面はナデを施す。器面が荒れているため調整は明らかでない点が多い。胎土には径1mm程度の砂粒を顕著に含んでいる。礫粒は石英・長石をはじめとして粘板岩・ホルンフェルス等が主体となるが、いずれも壺形～円礫で



第2図 遺物実測図



第3図 長刀鉾町遺跡出土遺物
(注2文献より転載)

ある。推定口径13.5cm, 頸径8.3cm, 最大腹径23.2cm。器高は約27cmを測る。

さて、この土器の最大の特徴は体部に円窓がある点である。円窓は肩部から最大腹径部にかけて穿たれ、下縁が直線的で上縁が弧を描く楕円状を呈している。焼成前にヘラによって切り取られたとみられ、端面は矩形である。円窓の短径は約9.5cm, 長径は17.5cmを測る。

共伴土器には弥生時代後期終末から庄内式期の在地の甕を始め、河内産の庄内式甕・古相を呈する布留式土器等がある。当該土器は、帰属時期を限定することは出来ないが、平底・分割成形痕などの特徴を参考にして考えると、弥生時代後期終末に相当する可能性を推すことができる。また、粘土素地・混和材は他のものと同じく在地のものであるので、外来的要素を備えた在地の土器ということができよう。

3. ま と め

山城盆地では、これまでに円窓付土器の例は少なく、管見にのぼるかぎりでは京都市長刀鉾町遺跡^(注2)・長岡京跡左京第35次調査出土例^(注3)があるのみである。長刀鉾町遺跡では第Ⅳ様式に比定される壺形土器が2例確認されていて、体部が扁球形を呈し、内1個体は調整手法・施文などから搬入土器である可能性が指摘されている(第3図)。

円窓付土器は、尾張地域を中心に伊勢湾沿岸に濃密に分布する土器である。愛知県朝日遺跡では222点を確認しており、伴出土器の検討の結果、貝田町新期に出現し始め、高蔵期から山中期の初期に盛行をむかえることが明らかにされている。この時期の器種はほぼ壺形土器に限られるが、次の山中期から欠山期に台付円窓土器・円窓付甕形土器が出現するに至り壺に円窓を穿つ事例が減少し、次第に消滅する傾向にある^(注4)という。

この指摘によれば長刀鉾町遺跡例は円窓付土器盛行期のものであるのに対し、当遺跡例は弥生時代後期終末ないし庄内併行期に属するものであり、尾張では壺形土器に窓を穿つ例が減少する時期にあっている。当資料は散発的なものであり、手焙り形土器など他器種との関係を含めて性格については改めて検討する必要があるが、興味深い事例といえる。

木津川河床遺跡では他に東海系の台付甕や欠山期のものと考えられる高杯の搬入もあり、円窓付土器はこうした土器を担った人々との交通関係の所産として評価することができる。

なお、小稿作成にあたっては、事実関係において松井忠春・黒坪一樹調査員より教示を得た。文末ながら記し、謝意を表したい。(田代 弘=当センター調査課調査員)

注1 黒坪一樹「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注2 『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』(財)古代学協会 1984

注3 『長岡京市文化財調査報告書』第14冊長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1985

注4 『朝日遺跡Ⅰ』愛知県教育委員会 1982

府下遺跡紹介

30. 長岡宮大極殿跡

長岡京は、桓武天皇が延暦3(784)年に奈良の平城京から遷した都として知られているが、近年まで10年の短命の都であるがため研究があまり進んでいなかった。しかし、発掘調査が進むにつれて様々なことがわかるようになってきた。これまでは、10年間の都なので工事もそれほど進んでいなかったろうという推定しかなされていなかった。しかし、各条坊を区切る大路・小路や官衙などがみつきり、かなり整備されていたことが明らかになった。また、宮域(天皇の居所、各官司の存在する所)内の調査では重圈文軒丸瓦や重画文軒平瓦が出土している。これらの瓦は後期難波宮で使われたものであるから、難波宮から長岡宮へ運ばれたことになる。つまり、長岡京の造営に際しては難波京からその資材が運搬されたという推定が可能になったのである。

このような発掘調査の成果もあって、文献史学の立場からもようやく研究が進むようになった。最近の研究では、遷都当初の延暦3～4年頃までは難波京の資材を用いて長岡京を造営し、2～3年中断の後、延暦8～9年頃から平城京の資材を使用して再び造営事業が活発になるという。また、平城京のときには難波京という陪都があり、中国風の複都制を採用していた。しかし、長岡遷都によって難波京は廃され、長岡京の時代以降は単一の都になったことも明らかになってきた。

こうして長岡京に関してはしだいに明らかになりつつあるのが現段階である。この長岡京の中で当時の政治が行われたのが宮内で、その中心的建物が朝堂院である。朝堂院はもともと政治を行う場所であったが、長岡京の時代には政治は各曹司(各官司の建物)で行われ、朝堂院ではもっぱら儀式がとり行われるようになった。その中で大極殿は天皇が出御する場所として最も重要なものである。

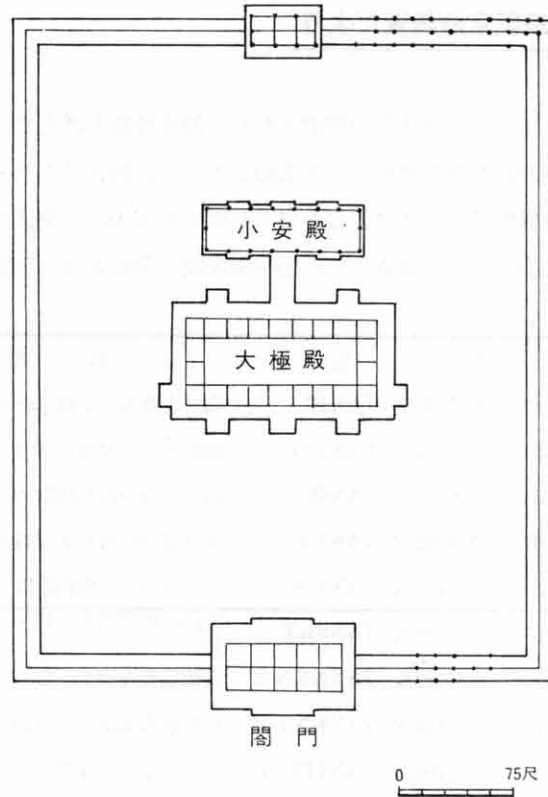
天皇が大極殿に出御する行事は、^{ちやうが}朝賀・^{こうさく}告朔のほか、天皇が^{そくい}即位するときやそのときどきの政務を聴く場合などがある。この



第1図 遺跡所在地 (1/25,000)

中で最もわかりやすいのが朝賀なので、これを例にとってみる。

朝賀は、正月一日に群臣が天皇に拝礼する儀式のことである。前年の12月の終わりになると、朝賀の準備のため、内匠寮が大極殿の中に天皇の座である八角形の高御座たかみくらを敷設する。皇后の座も大極殿の中に置かれ、正月一日には揃って出ることになる。正月一日に天皇は小安殿で準備したあと大極殿に出御し、高御座の中に入る。高御座の中に入ると、天皇の姿は直接見られないようになる。臣下は朝堂院の各々の座につき、天皇に拝礼するのである。このように、天皇は臣下に対して直接顔を見せるようなことをせず、閣門より北側のいわゆる大極殿院は、天皇・皇后のみの専有空間となっているのである。



第2図 大極殿院遺構配置図
(『向日市史』上巻より再トレースした。)

長岡宮の大極殿は東西138尺(約41.4m)、南北72尺(約21.6m)の規模を持つが、1961年の発掘調査の時点で壇上積基壇の切石が失われていたため、この数値もそれほど正確なものではない。屋根の構造は寄棟造か入母屋造かのいずれかであったと推定されている。また、後殿(小安殿)も見付き、これまでの平城宮や難波宮では見られない形をしていた。小安殿は平城宮や難波宮では北面回廊と続いたが、長岡宮の段階ではじめて殿舎として独立した。これは儀式的の整備を示すのかもしれない。(土橋 誠)

〈参考文献〉

『向日市史』上巻 向日市 1983

『新版長岡京発掘』NHKブックス464 1984

上田正昭編『都城』社会思想社 1976

和田 萃「タカミクラ朝賀・即位式をめぐる一」(岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究』上 塙書房) 1984

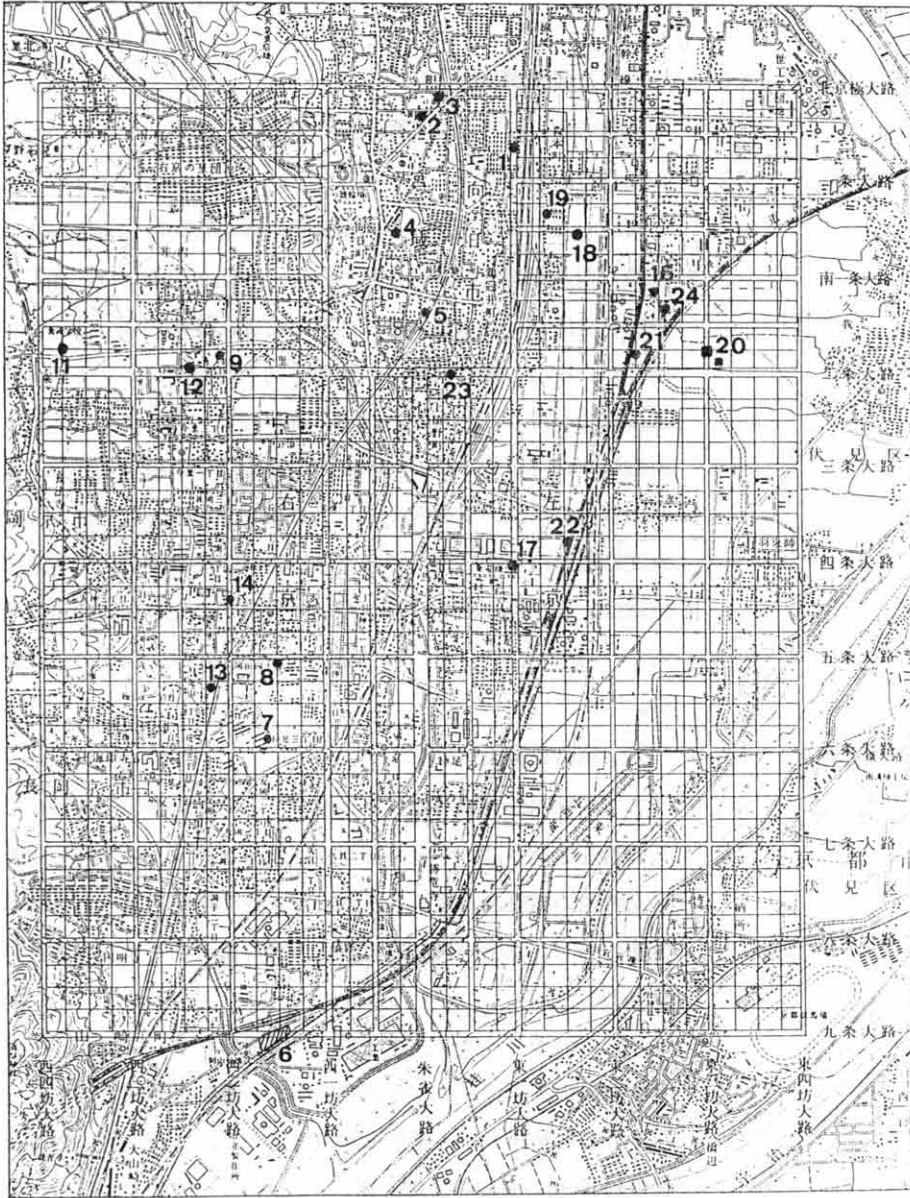
長岡京跡調査だより

いよいよ夏休みの季節となり、調査件数も増えていきます。この7月・8月の2か月間に行われた発掘調査は、下表のとおり、長岡宮跡5件・長岡京跡右京域10件・同左京域9件の計24件あります。なかでも長岡宮跡第161次調査では、礎石建物跡を検出し、長岡京跡左京第130次調査では、南一条条間大路南側溝を確認するとともに、溝内からは建築部材

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第159次	7AN1C	向日市森本町下森本6-5	向日市教委	60. 7. 1～7. 9
2	宮内第160次	7AN11G	向日市寺戸町殿長19-1	〃	7. 15～7. 28
3	宮内第161次	7AN6F	向日市寺戸町初田24-2	〃	7. 17～7. 27
4	宮内第162次	7AN13E	向日市寺戸町東ノ段21-3, 4	〃	7. 17
5	宮内第163次	7AN14K-2	向日市鶏冠井町山畑21	〃	8. 1～8. 13
6	右京第188次	7ANSKT	大山崎町円明寺門田・一丁目	大山崎町教委	3. 31～10. 21
7	右京第193次	7ANNKN-2	長岡京市友岡1丁目	(財)京都府埋	7. 5～8. 23
8	右京第194次	7ANKNT-2	長岡京市開田3丁目10	〃	6. 19～8. 2
9	右京第195次	7ANITT-11	長岡京市今里4丁目 ³² ₃₃₋₁	(財)長岡京市埋	5. 27～7. 7
10	右京第200次	7ANSTR-2	大山崎町円明寺殿山地内	大山崎町教委	7. 2
11	右京第201次	7ANGAR-3	長岡京市井ノ内朝日寺23	(財)長岡京市埋	7. 4～9. 4
12	右京第202次	7ANIAN-4	長岡京市今里4丁目253-1	〃	7. 15～8. 13
13	右京第203次	7ANKJS	長岡京市天神1丁目220-1	〃	7. 16～8. 2
14	右京第204次	7ANKST-3	長岡京市長岡2丁目425-5	〃	7. 17～8. 15
15	右京第205次	7ANKTR-2	長岡京市開田3丁目116	〃	8. 19～8. 31
16	左京第124次	7ANENR	向日市鶏冠井町西金村	(財)京都府埋	5. 8～8. 30
17	左京第125次	7ANLKC	長岡京市馬場北石ヶ町1-1	(財)長岡京市埋	5. 13～8. 10
18	左京第130次	7ANEJS-5	向日市鶏冠井町十相11-1	向日市教委	6. 6～8. 3
19	左京第131次	7ANEIB	向日市鶏冠井町一の坪	〃	6. 20～7. 6
20	左京第133次	7ANWAN	京都市伏見区久我西出町	(財)京都市埋	6. 17～
21	左京第134次	7ANEKZ-5	向日市鶏冠井町清水8	向日市教委	7. 4～7. 31
22	左京第135次	7ANFHD-3	向日市上植野町菱田6-1	〃	7. 15
23	左京第136次	7ANFJK-2	向日市上植野町浄徳10-5	〃	8. 26～9. 5
24	左京第137次	7ANEMR-2	向日市鶏冠井町南金村2-3	〃	8. 26～9. 7

長岡京跡調査地一覧表

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

名が記された木簡が出土するなど、多くの成果が上がっている。

これら7月24日・8月28日の長岡京連絡協議会で報告された計24件の発掘調査のうち、主だったものを以下に簡単に述べる。

- 宮内第159次 (1) 向日市教育委員会
宮域の西辺に当り、長岡京期の東西溝を検出した。
- 宮内第161次 (2) 向日市教育委員会
宮域の北辺部に当り、今回調査地の東北約30mの所で、北京極大路の南北両側溝が検出されている。今回の調査では、礎石及び根石を検出し、北京極大路に南接して礎石建物が在ったことが判明した。検出した建物跡は、東西方向1間以上、南北方向3間以上の規模を持ち、建物の南西端を確認した。柱跡は、いずれも1辺約1.2mの掘形に、30~50cm大の石を詰めて根石となし、最も北側のものには、1辺約1m、厚さ約0.5mの礎石が残っている。柱間距離は、南北・東西方向ともに3m等間を測る。この建物の位置は、北京極大路南側溝から、一番南側の柱跡が約14mの所にあり、また、宮の南北の中軸線から約72m東に西側の柱列がある。
- 右京第188次 (6) 大山崎町教育委員会
大山崎町の体育館建設に伴う調査で、長岡京跡の南縁部に当る。この調査地からは、中世の掘立柱建物跡1棟・土壇1基・溝数条、平安時代の轍痕、古墳時代後期の竪穴式住居跡3基・合口甕棺墓1基、そして弥生時代の旧河道や方形周溝墓かと思われるもの等を検出した。
- これらのうち、竪穴式住居跡は、方形のプランを呈し、1辺約5m前後を測る。いずれの住居跡からも竈跡は確認できなかったが、うち1基からは、竈形土器を検出した。また、合口甕棺墓は、長さ約45cmの長胴の土師器甕に、口縁部を打ち欠いた須恵器の甕で蓋をしたものである。旧河道からは、弥生時代中期の土器が出土し、轍痕からは、その車輪幅が約1.7mと復元される。このほか、縄文晩期の土器片が出土しており、近在に縄文時代の集落の存在を窺わせる。

- 右京第 194 次 (8) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 調査地は、西二坊坊間小路の推定地に当り、長岡京期の南北溝 4 条、掘立柱建物跡 1 棟、柱穴等を検出した。南北溝は、東から幅約 1.1m の S D04、幅約 2.5m の S D02、幅約 1.1m の S D03、幅約 5.3m の S D01 の 4 条である。このうち、S D02・04 の 2 条の溝が西二坊坊間小路の東西両側溝に相当すると思われる。各溝間の距離は、S D04 と S D02 で約 8.6m、S D04 と S D03 で約 12.7m、S D02 と S D03 で 4.1m を測る(いずれも溝心々間)。それぞれの国土座標の Y 値は、S D04 が -27,627.4、S D02 が -27,635.0、S D03 が -27,640.1 である。
 掘立柱建物跡は、東西 3 間・南北 1 間以上の建物で、S D03 の西肩に接して建つ。この建物は、S D01 によって削られ、S D01 からは、土器が多量に出土している。このほか、S D01 の西と S D04 の東で、それぞれ東西方向の柱穴列を検出した。
- 右京第 195 次 (9) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 長岡京期から平安時代にかけての掘立柱建物跡・柵列・溝・土壇のほか、古墳時代の竪穴式住居跡・土壇・溝等を検出した。遺物は、長岡京期と平安時代及び古墳～奈良時代にかけての土師器・須恵器のほか、弥生土器や縄文土器、サヌカイト及びチャート製のフレーク等も出土している。
- 右京第 201 次 (11) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 遺構としては、中世の溝・井戸・土壇等を検出した。遺物は、中世の瓦器や陶器・土師器のほか、長岡京期や古墳時代後期から飛鳥時代にかけての土師器・須恵器、縄文土器、すり石や石皿・石錘等が出土した。
- 右京第 202 次 (12) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 この調査地は、長岡京の二条大路の推定地に当る。ここでは、弥生時代後期の竪穴式住居跡を 2 基検出した。このほか、中世の溝とピットも多数確認している。住居跡のうち 1 基は、円形のプランを持つと推定され、直径 7.5m 余りを測る。両者とも壁溝が確認されている。遺物は、弥生土器のほか、平安時代の緑釉陶器・黒色土器・土師器・須恵器・瓦や、鎌倉時代の瓦器・陶器等も

- 出土している。
- 右京第 203 次 (13) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
縄文時代の後・晩期の土器片や、サヌカイト片等が出土している。
- 右京第 204 次 (14) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
古墳時代の竪穴式住居跡や平安時代の溝・ピット、鎌倉時代の溝・ピット・土葬墓等を検出した。竪穴式住居跡は、1辺 5.5m 前後の方形のプランを呈する。また、弥生時代の打製石鏃が出土している。
- 右京第 205 次 (15) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
長岡京期の土壇等を検出している。この土壇からは、長岡京期の土器が多量に出土し、特に土師器が多い。その規模は、長軸約 5 m、短軸約 3 mを測る。
- 左京第 124 次 (16) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
中世の素掘り溝12条、長岡京期の南北溝1条・土壇4基、弥生時代の竪穴式住居跡1基・土壇4基等を検出した。長岡京期の南北溝は、北に対しやや西に振れ、途中で消えている。弥生時代の竪穴式住居跡は、一部を検出し、大半はトレンチ外にあるが、円形のプランを呈し、直径は6m前後と推定される。
- 左京第 125 次 (17) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
長岡京の四条大路と東一坊大路が交差する地点に当り、今回、四条大路と東一坊大路の側溝を検出したほか、長岡京期の宅地割りの溝や柵列等も検出した。東一坊大路の側溝である南北溝は、大極殿心からの推定割り付け心よりは西に位置するものの、この溝から東で宅地割りの溝や柵列が検出されている。宅地割りの溝は、幅約0.3mの東西溝で、柵列は、この溝と東一坊大路側溝に平行して、L字状に曲がるものである。東西3間分、南北2間分を検出している。なお四条大路の側溝は、この溝から南30m余りまでトレンチは延びているが、長岡京期の東西溝は検出されていない。
このほか、古墳時代の土器溜りや弥生土器を検出している。
- 左京第 130 次 (18) 向日市教育委員会
長岡京の左京南一条二坊十一町に位置し、昨年度当調査研究セ

ンターが行った左京第118次調査地の南接地に当る。左京第118次調査でその一部を検出した南一条条間大路南側溝を、延長約35mにわたって確認した。溝幅は、やはり2.5m前後を測る。また、この溝の南1mには、同じ長岡京期の幅1m前後の東西溝が平行に走り、このほか2間×3間の南北棟の掘立柱建物跡や柵列等の長岡京期の遺構を検出している。ほかにも、長岡京期の遺構に削られた溝等がある。

南一条条間大路の南側溝からは、長岡京期の土師器・須恵器等のほか、木簡が出土している。木簡のうち一枚は、「進上政所歩板捌杖箒柳參村束柱拾根薦陸束朮木貳村斗貳村箕形板貳枚 右載□開□車□兩」と多数の建築部材名が記されている。またその建築部材を政所に車に載せ進めたと言う記事内容は、左京第118次調査等、周辺の調査結果を併せ、この近辺の宅地の性格を窺い知る一端となろう。

左京第131次 (19)

向日市教育委員会

中世の溝・ピット、長岡京期のピットを検出するとともに、土師器・須恵器・瓦器・瓦等のほか、縄文時代後・晩期の縄文土器が出土した。

左京第134次 (21)

向日市教育委員会

長岡京の東三坊第1小路の東西両側溝や、同じ長岡京期の溝・ピット、中世の素掘り溝、古墳時代後期の自然流路等を検出している。東三坊第1小路の東西両側溝は、溝心々間で9m余り、路面幅で8m前後を測る。それぞれの溝幅は、東側溝が0.6~0.8m、西側溝が1.4m前後である。

遺物は、長岡京期の土師器・須恵器・木製品・墨書土器や、古墳時代後期の須恵器、縄文時代晩期の縄文土器が出土した。ほかにサヌカイトフレークも出土している。なお、墨書土器には「田津」・「井」等と記されている。

(山口 博)

第4回「小さな展覧会」を終えて

昭和56年度に当調査研究センターが発足し、その年度内に発掘調査した成果を一般に広く知らせ、発掘調査事業を理解してもらうことと、文化財の保存活用及び資料の公開を目的として、昭和57年7月に第1回「小さな展覧会」を企画・実施し、今回で第4回を迎えたのであります。

第1回と第2回の展覧会は、京都市上京区の旧庁舎で実施し、第3回は新築された現庁舎で実施してきました。しかし、会場はいずれも狭く、回を重ねるごとに観覧者が増えてきていることから、今回からは隣接する向日市文化資料館において会場の提供を受けました。また、第2回から京都府教育委員会の共催を得、今回は加えて向日市教育委員会の後援を得ましたことで、この「小さな展覧会」が今まで以上に盛況になったことと思います。

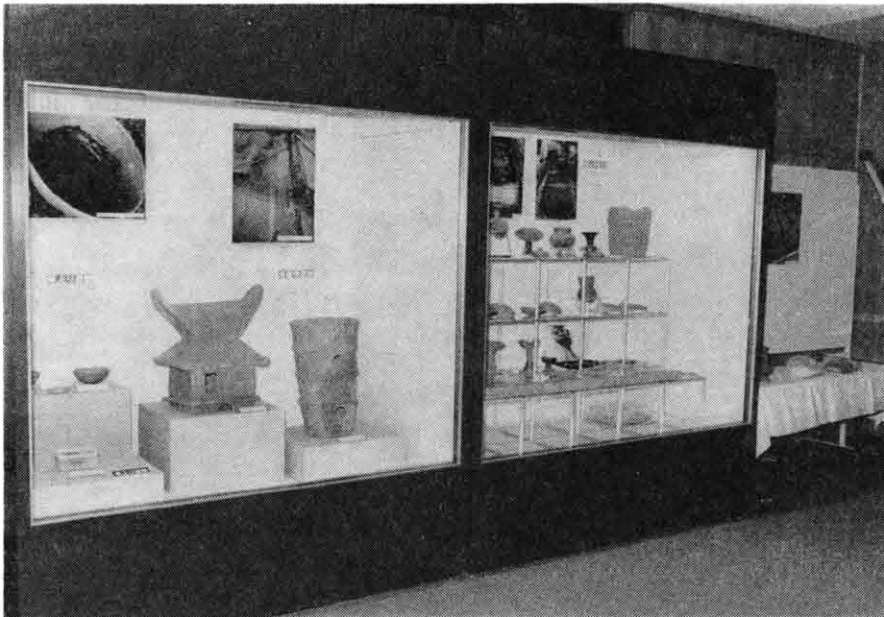
この展覧会の開催案内送付先は、府下の市町村教育委員会・文化財関係機関（関係者）及び学校等であるが、事前に報道機関にも発表しました。特に今回の観覧者の中に、テレビをみて来たという一般の方が多くおられた。ちなみに期間中の観覧者総数は、1,312名で、第1回の330名・第2回534名・第3回673名をしのぐ多数の人が観覧され、予想をはるかに上回り、関係者の一員として大変うれしく思っている次第です。



第4回 小さな展覧会会場風景

今回の展覧会開催にあたっては、過去3回の反省点をふまえ、遺物の呼称や、その遺物が古代において、生活上どのように使われていたのか、等の説明を全遺物に付けてみた。しかし、一般の方では遺物の名称が読みとれない文字や、なじみのない文字もあり、「ルビ付けがほしかった。」との御意見を聞き、大いに反省させられました(甕・甗^{かめ}・甗^{はそう}・提瓶^{ていびん}等)。また、今回初めて展示ケースを使つての実施であったが、京都府立山城郷土資料館の御指導も受け、今までと違った本格的な展覧会の感を受けたのは、筆者ばかりではないと思います。また、「小さな展覧会」の「小さな」を除いてもよいのではないかという御意見も賜りました。しかし、当該年度内の発掘調査で出土したごく一部の遺物を展示しているにすぎず、現に石本遺跡から出土している貴重な資料である木器類や、隼上り古墳から出土の鉄器類は、保存のための化学的処理に出しているところで、出品できない状況もあります。従つて、内部では当分ささやかに、「小さな展覧会」として回を重ねて行こうと話しています。

次回からは、今回と同じく向日市文化資料館を会場として実施できる見通しで、京都府教育委員会及び向日市教育委員会の協力を得ることはもちろん、京都府立丹後・山城両郷土資料館の御協力をお願いしたいと考えています。府下北部・南部でも開催できれば、更に広く発掘調査事業や京都府の歴史・文化財保護について、一般の御理解が深まることと思ひます。



第4回 小さな展覧会会場展示風景(1)



第4回 小さな展覧会会場展示風景(2)

また、今年度は当調査研究センター発足5周年にあたり、昭和61年度に実施する「小さな展覧会」も第5回目と、一つの区切りになります。従って、第5回「小さな展覧会」の企画も考えねばならないような気がしており、皆様方の御意見等を賜われれば幸いです。

なお、京都府立山城郷土資料館では、9月7日から10月6日まで「発掘成果速報—昭和59年度の調査から—」と題してこの展覧会に出展した遺物と、京都府南部の遺跡から出土した遺物を加えて企画展を開催されていることを報告します。 (長関 和男)



センターの動向 (60.6~8)

1. できごと

- 6.10 京奈バイパス関係遺跡(綴喜郡田辺町)発掘調査開始
- 6.13 全国埋蔵文化財連絡協議会近畿ブロック会議一於和歌山県高野町一出席(荒木事務局長, 堤調査課長)
- 6.14 小金岐4号墳(亀岡市)発掘調査開始~8.9
- 6.19 長岡京跡右京第194次調査(長岡京市)開始~8.2
- 6.20 昭和59年度会計監査実施さる。
- 6.21 青野遺跡(綾部市)発掘調査開始~8.6
- 6.26 第13回役員会及び理事会開催一於パレスサイドホテル一福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 岸 俊男, 佐原真, 藤井 学, 中沢圭二, 原口正三, 足利健亮, 藤田价浩, 井上裕雄, 東条寿各理事, 荒木昭太郎常務理事出席
- 6.28~29 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会一於茨城県水戸市一出席(荒木事務局長, 富田囑託, 杉江囑託)
- 6.29 陝西省文物保護考察団(許汝州団長以下9名)来所
7. 5 長岡京跡右京第193次調査(長岡京市)開始~8.22
- 7.18 下畑遺跡(与謝郡野田川町)発掘調査関係者説明会実施
- 7.19 下畑遺跡(与謝郡野田川町)発掘調査終了5.20~
理事協議会開催一於当調査研究センター研修室一福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 川上 貢, 足利健亮, 原口正三各理事, 荒木昭太郎常務理事出席
- 7.26 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査関係者説明会実施
- 7.31 長岡京跡右京第194次(長岡京市)発掘調査関係者説明会実施
8. 5 長岡京跡左京第124次(向日市)発掘調査関係者説明会実施
味方遺跡(綾部市)発掘調査開始
8. 6 青野遺跡(綾部市)発掘調査関係者説明会実施
- 8.12 長岡京跡右京第193次(長岡京市)発掘調査関係者説明会実施
- 8.17~18 第18回埋蔵文化財研究会一於島根県松江市一出席(原口理事, 辻本主任調査員, 小山, 小池, 竹原, 村尾, 森下, 荒川, 三好各調査員)
- 8.23 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡, 仁田城跡(福知山市)発掘調査関係者説明会実施
- 8.28 千代川遺跡第10次(亀岡市)発掘調査開始
- 8.29 小金岐4号墳(亀岡市)発掘調査関係者説明会実施
- 8.30 上中遺跡(北桑田郡京北町)発掘調査関係者説明会実施
長岡京跡左京第124次(向日市)発掘調査終了5.8~

2. 普及啓発事業

- 5.30～6. 9 亀岡市教育委員会主催「亀岡市30年の歩みと伝統産業展」に、医王谷3号墳出土遺物92点を出品協力
- 6.30 『京都府埋蔵文化財情報』第16号刊行
7. 2～11.13 福知山市教育委員会主催特別展「大内城」展
- 7.12～9.10 京都府立丹後郷土資料館主催「祈りの遺跡—丹後の古代信仰—」展に、古殿遺跡出土遺物を出品協力
- 7.13 第28回研修会—於京都社会福祉会館—開催(発表者及び題名)佐藤晃一「加悦町の埋蔵文化財保護と調査研究の現状」玉村登志夫「京都市の埋蔵文化財保護と調査研究の現状」山中 章「向日市の埋蔵文化財保護と調査研究の現状」近藤義行「城陽市の埋蔵文化財保護と調査研究の現状」
- 8.20～9. 1 第4回「小さな展覧会」—於向日市文化資料館研修室—開催，参観者1,312名
- 8.24 第29回研修会—於向日市市民会館—開催(発表者及び題目)藤原敏晃「福知山市奥谷西遺跡の遺構・遺物について」小池 寛「隼上り古墳・隼上り遺跡出土の遺物について」田代 弘「小金岐1号墳について」
- 8.25 口丹波史談会において堤調査課長「亀岡のあけぼの」講演

受贈図書一覧 (60.6~8)

- (財)岩手県埋蔵文化財センター 岩手の遺跡, 考古遺物資料集 第5集, 紀要V(昭和59年度), 曲田遺跡発掘調査報告書(第1分冊・第2分冊), 黄金堂遺跡発掘調査報告書, 小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書, 川口Ⅰ遺跡発掘調査報告書, 川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書, 川内遺跡発掘調査報告書, 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
- (財)いわき市教育文化事業団 日吉下遺跡, 四郎作遺跡
- (財)茨城県教育財団 年報4 昭和59年度, 大谷津A遺跡(上)・(下), 奥山B遺跡・奥山下根遺跡, 南三島遺跡1・2区(上)・(下)
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 小町田遺跡, 女堀, 藪田遺跡
- 大宮市遺跡調査会 西大宮バイパス№1・№2遺跡, 原遺跡, 宮ヶ谷塔貝塚, 東北原遺跡
- (財)千葉県文化財センター 研究連絡誌 第9号~第13号, 縄文時代(1), 芦田台1・2号塚, 蔵書目録Ⅰ, 佐倉市タルカ作遺跡, 東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ, 栄町大畑Ⅰ-2遺跡, 主要地方道成田松尾線Ⅱ, 千葉市種ヶ谷津遺跡, 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ, 主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ, 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ, 船橋市八木ヶ谷遺跡, 千葉市藁輪遺跡, 研究紀要9, 千葉市村田服部遺跡, 東総用水, 八千代市北海道遺跡, 君津市九十九坊廃寺趾確認調査報告書, 竜角寺古墳群発掘調査報告書 第3次, 千葉県中近世城跡研究調査報告書 第5集, 千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 昭和58年度, 主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- (財)市原市文化財センター 池ノ谷遺跡・福増遺跡
- (財)茂原市文化財センター 小林西之前遺跡
- 東北新幹線中里遺跡調査会 中里遺跡Ⅰ, 同Ⅱ
- 武蔵国分寺関連遺跡調査会 武蔵国分寺跡発掘調査報告
- 石川県立埋蔵文化財センター 石川県立埋蔵文化財センター年報 第5号, 昭和59年度県管ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要, 中島町宮前熊甲神社遺跡・土川遺跡, 鶴来町白山遺跡・白山町墳墓群(Ⅲ), 門前町道下元町遺跡, 金沢市北安江遺跡, 北塚遺跡群
- 山梨県埋蔵文化財センター 妻神遺跡・真福寺遺跡・手古松遺跡・市川北遺跡・勝沼氏館跡・藤岱遺跡, 飯田一丁目遺跡, 銚子塚古墳附丸山塚古墳
- (財)長野県埋蔵文化財センター 長野県埋蔵文化財センター 年報1

(財)滋賀県文化財保護協会	県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-3, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-5-2, 同Ⅺ-7, 横土井(観音寺)遺跡発掘調査報告書, 県道木部野洲線・県道大津能登川長浜線交通安全施設工事関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ, 湖岸堤管理用道路(南山田工区)建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書, 余呉町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ, 服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ, 薬師堂遺跡発掘調査報告書
(財)大阪府埋蔵文化財協会	発掘調査規程, 埋蔵文化財発掘調査仕様書
(財)東大阪市埋蔵文化財協会	(財)東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ, 甦る河内の歴史, 若江北遺跡, 高井田遺跡第2・3次調査報告, (財)東大阪市文化財協会年報 1983年度
和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ
(財)鳥取県埋蔵文化財センター	里仁古墳群
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 59~61
広島県立埋蔵文化財センター	下本谷遺跡第6次発掘調査概報, 亀山遺跡 第4次発掘調査概報, 石鎚権現遺跡群発掘調査報告 C地点, 備後国府跡
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	石神製鉄遺跡, 上日神谷遺跡発掘調査報告書, 小塚八幡神社前古墓発掘調査報告書, 五反田第1・2号古墳発掘調査報告書, 大官遺跡発掘調査報告書 兼代地区Ⅰ, 大楨遺跡群, 笹利迫田遺跡発掘調査報告書, 須賀谷古墳群・壘谷東遺跡発掘調査報告書, 三段田城跡発掘調査報告書, 行年遺跡発掘調査報告書, 石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告書, 年報Ⅰ
山口県埋蔵文化財センター	穴観音古墳
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	馬場山遺跡第B・C・D地点, 伊川遺跡, 埋蔵文化財調査室年報Ⅰ, 白岩西遺跡, 下吉田遺跡, 愛宕遺跡Ⅰ, 勝円遺跡 C地点, 長野E遺跡調査報告書
平賀町教育委員会	唐竹遺跡発掘調査報告書
陸前高田市教育委員会	貝畑貝塚発掘調査概報, 中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅰ
水沢市教育委員会	水沢遺跡群範囲確認調査昭和59年度発掘調査概報, 胆沢城
井川町教育委員会	大野地遺跡第1次調査概報
石岡市教育委員会	石岡市の文化財
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報, 上欠遺跡, 谷館野西遺跡, 下野国分寺跡Ⅰ, 下野国府跡Ⅵ, 那須官衙関連遺跡発掘調査報告, 何山神社跡遺跡, 上三川高校地内遺跡調査報告, 自治医科大学周辺地区, 一般国道4号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 御城田
小見川町教育委員会	千葉県小見川町埋蔵文化財分布地図, 大塚山古墳測量調査報告書,

東京都教育委員会	増田長峰遺跡発掘調査報告書, 十老山古墳発掘調査報告書
東京都北区教育委員会	東京の遺跡
狛江市教育委員会	田端不動坂遺跡
富山県教育委員会	岩戸八幡神社遺跡, 埴上遺跡, 狛江市の古墳(1), 和泉遺跡・原南遺跡, 箕和田北久保遺跡
入善町教育委員会	都市計画道路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(3), 北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編 2, 昭和59年度富山県埋蔵文化財調査一覧, 富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第7次緊急発掘調査概要
立山町教育委員会	じょうべのま遺跡—C・K地区の調査—, じょうべのま遺跡発掘調査概報(8)
加賀市教育委員会	野沢狐幅遺跡発掘調査概報
小松市教育委員会	藤ノ木遺跡
埴崎市教育委員会	戸津
境川村教育委員会	中田小学校遺跡
松本市教育委員会	物見塚遺跡
多治見市教育委員会	松本市島内遺跡群, 松本市赤木山遺跡群1, 推定信濃国府, 松本市島立南栗・北栗遺跡・高網中学校遺跡条里の遺構
愛知県教育委員会	西坂遺跡C地点(第Ⅲ次)発掘調査報告書, 小名田西ヶ洞1号窯発掘調査報告書, 赤坂1号窯発掘調査報告書
滋賀県教育委員会	愛知県古窯跡群分布調査(Ⅳ)
野洲町教育委員会	滋賀県文化財調査年報 昭和57年度
日野町教育委員会	野洲町内遺跡群発掘調査概要 昭和59年度, 野洲町内遺跡 分布調査報告書, 久野部遺跡発掘調査概要, 昭和58年度 野洲町遺跡群発掘調査概要, 昭和56年度 三堂・野々宮遺跡他発掘調査概要報告書
草津市教育委員会	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集
水口町教育委員会	花摘寺廃寺発掘調査報告書
泉佐野市教育委員会	柏木北山塚
堺市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財分布調査概要Ⅰ, 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅴ, 湊遺跡—84-2区の調査—, 船岡山遺跡B地点発掘調査報告書—84-3区の調査—
羽曳野市教育委員会	堺市文化財調査報告第20集, 四ツ池遺跡—OB87・88—陶邑・陶器山地区250号窯
八尾市教育委員会	古市遺跡群Ⅵ
兵庫県教育委員会	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書, 八尾市文化財紀要Ⅰ
	兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度, 養久山42・43号墳, 松ノ

神戸市教育委員会	本古墳群, 大森谷遺跡, 前東代遺跡
明石市教育委員会	楠・荒田町遺跡発掘調査報告書
加古川市教育委員会	魚住古窯跡群発掘調査報告書
龍野市教育委員会	カンス塚古墳, 西条廃寺
赤穂市教育委員会	片吹遺跡
西紀・丹南町教育委員会	史跡赤穂城跡本丸発掘調査報告書Ⅱ
加東郡教育委員会	丹波国大山荘現況調査報告Ⅰ
奈良市教育委員会	穂積・高町遺跡
	奈良の文化財 №3, 平城京出土軒瓦型式一覧Ⅰ, 平城京左京二条二坊十二坪, 平城京東市跡推定地の調査Ⅲ, 市道九条線関係遺跡発掘調査概報(Ⅲ), 奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査概報
鳥取市教育委員会	桂見墳墓群
岡山県教育委員会	岡山県埋蔵文化財報告15
広島市教育委員会	岡谷遺跡・狐ガ城古墳発掘調査報告, 池の内遺跡発掘調査報告
山口県教育委員会	都町北遺跡, よみがえる弥生のムラ, 小出遺跡, 長門深川古窯, 奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡, 大井大寺廃寺
福岡県教育委員会	夜須地区遺跡群Ⅱ, 浜山・千鳥遺跡, 蒲田部木原遺跡, 石崎曲り田遺跡(Ⅲ), 穴ヶ葉山古墳群, 塚堂遺跡Ⅳ(第1分冊・第2分冊), 三雲遺跡 南小路地区編, 西新町遺跡, 東小田遺跡群, 東・太田遺跡
宇佐市教育委員会	御幡遺跡(Ⅱ)・高森城跡(Ⅱ)
鹿児島県教育委員会	王子遺跡, 長浜金久遺跡, 成岡遺跡Ⅱ, 国分・単人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書
東北歴史資料館	多賀城と古代東北
日立市立郷土博物館	日立市郷土博物館収蔵品資料目録 第3集, 年報 第6号, 日立市郷土博物館紀要 5
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館調査報告書 第1号, 群馬県立歴史博物館紀要 第6号
千葉市加曾利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第12号
山武考古学研究所	新堀遺跡発掘調査報告, 南かんみょう遺跡発掘調査報告書
流山市立博物館	流山市立博物館年報 №7, 埴輪
大田区立郷土博物館	埋もれていた日用品の美
(財)出光美術館	出光美術館 館報50
神奈川県立博物館	神奈川県立博物館研究報告 第11号
鎌倉考古学研究所	白山遺跡, 台山藤源治遺跡

福井県立朝倉氏遺跡資料館	一乗谷朝倉遺跡 XVI, 豊原寺跡 V (推定) 僧房跡発掘調査概報, 朝倉氏遺跡資料館紀要 1984
土岐市美濃陶磁歴史館	高根山古窯跡群
浜松市博物館	地藏平遺跡範囲確認調査報告書, 瓦屋西 C 古墳群・瓦屋西 II 遺跡範囲確認調査報告書, 下滝遺跡
名古屋市博物館	古墳時代の馬具
名古屋市見晴台考古資料館	年報 IV, 鳴海廃寺発掘調査概要報告書, 第 III 次瑞穂遺跡発掘調査概要報告書, 込高新田堤防発掘調査概要報告書, 第 II 次呼続遺跡発掘調査概要報告書, 富士見町遺跡発掘調査概要報告書, 尾張元興寺跡第 I 次発掘調査概要報告書, NN311 号古窯跡発掘調査報告書, 旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(Ⅲ), 同(Ⅳ), 第 III 次幅下小学校遺跡発掘調査概要報告書
豊橋市美術博物館	四ツ塚 3 号墳・4 号墳発掘調査報告書
大阪城天守閣	大阪城天守閣紀要 第13号
堺市博物館	堺の遺跡と出土品
柏原市歴史資料館	大県・大県南遺跡, 大県南遺跡, 本郷遺跡・玉手山遺跡
神戸市立博物館	研究紀要 第 2 号, 神戸市立博物館年報№ 2, 館藏品目録 地図の部 2, 同 考古・歴史の部 2, 同 美術の部 2
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館図録, 西宮の歴史と文化
奈良国立文化財研究所	遺跡整備資料 IV, 奈良国立文化財研究所年報 1984, 法隆寺発掘調査概報 II, 同 III, 甲斐寺本廂寺 I, 同 II, 平城宮発掘調査出土木簡概報(18), 平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告, 平城京左京四条二坊十五坪発掘報告, 平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書, 昭和59年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
鳥取県立博物館	郷土と博物館 第30巻 第 2 号
徳島県博物館	忌部山古墳群
九州歴史資料館	大宰府史跡出土木簡概報(二)
東洋大学文学部史学研究室	白山史学 第21号, 東洋大学文学部紀要 第38集
日本大学史学会	史叢 第35号
立正大学文学部考古学研究室	奈良地区遺跡群発掘調査報告
大阪大学国史研究室	長法寺南原 III
神戸女子大学史学会	神女大史学 第 3 号
天理大学博物館学研究室	小丸古墳群
岡山大学埋蔵文化財調査室	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1, 同 2, 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第 1 集

広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室

宮崎大学

東邦大学附属東邦高等学校考古学研究会

朝鮮学会

(財)古代学協會

広島考古学研究会

京都市埋蔵文化財調査センター

京都府教育委員会

向日市教育委員会

長岡京市教育委員会

宇治市教育委員会

八幡市教育委員会

笠置町教育委員会

宮津市教育委員会

岩滝町教育委員会

京都府立丹後郷土資料館

京都府立山城郷土資料館

京都府立総合資料館

京都市歴史資料館

平安博物館

京都大学埋蔵文化財センター

京都大学構内遺跡調査会

(財)京都府文化財保護基金

泉 森 咬

稲 垣 晋 也

井 上 定 清

帝釈峽遺跡群発掘調査室年報Ⅶ

宮崎大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ

東邦考古6, 同9, 同10, 高野台遺跡発掘調査報告書, 佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ

朝鮮学報 第115輯

古代文化 第37巻第6号~8号

草戸千軒町遺跡, 草戸千軒

ケシ山窯跡群発掘調査概要報告

埋蔵文化財発掘調査概報 1985, 東寺観智院金剛藏聖教目録16~20, 本能寺古文書目録, 重要文化財 三宝院宝篋印塔修理工事報告書, 重要文化財 妙心寺仏殿修理工事報告書, 京都の文化財 第三集

向日市埋蔵文化財調査報告書 第16集, 同 第17集

掘りおこした郷土史

大鳳寺跡第5次発掘調査概報

平野山瓦窯跡発掘調査概報

史跡及び名勝笠置山保存管理計画策定報告書

宮津市の指定文化財

岩滝町文化財調査報告 第7集

丹後郷土資料館報 第6号, 祈りの遺跡—丹後の古代信仰—

山城郷土資料館報 第3号

中世の京都, 中世の寺院

京都市歴史資料館紀要 第2号, 京都市歴史資料館年報 №3

太山寺坊院跡発掘調査報告, 宿布古墳群, 平安京朝堂院跡, 平安京高倉宮・曇華院跡, 平安京左京七条三坊五町, 平安京左京八条三坊二町, 平安宮推定大極殿跡, 堺市鮎松南高田遺跡, 三条西殿跡, 古代文化第35巻第8号, 同第36巻第1号, 奈良岡遺跡発掘調査報告書, 本庄町遺跡発掘調査報告書, 寺田遺跡発掘調査報告書

京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ

京都大学北部構内B J 31区の調査

京都の美術工芸 京都市内編 上

大和を掘る

古代の隅木蓋瓦, 山岳信仰の遺宝

大阪文化誌 第18号

置 田 雅 昭
神 谷 正 弘
菊 地 敏 記
久 保 哲 正
関 秀 夫
関 口 功 一

大和の国と天理の歴史
水源地遺跡発掘調査報告
上野塚古墳，中村遺跡
恭仁宮跡昭和59年度発掘調査概要(抜刷)
経塚
史跡上野国分寺跡発掘調査概要5，古代史研究 第3号，同 第4号

—編集後記—

ようやく暑い夏も過ぎ、しのぎやすい季節になりました。『情報』第17号をお届けします。

今回は、福知山市の薬王寺古墳群の発掘調査概要を中心に掲載しました。本文にもありますように、同古墳群から組合式箱式石棺を検出しており、京都府下でも珍しい例といえます。

また、本号も資料紹介を掲載しました。木津川河床遺跡から出土した円窓付土器について紹介していますが、これも珍しい出土例です。よろしく御味読下さい。

(編集担当 = 土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第17号

昭和60年9月29日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亮

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)